

学童疎開船対馬丸

引率訓導たちの記録

対馬丸疎開学童 引率訓導証言記録プロジェクト 編著

対馬丸撃沈事件とは

一、背景

アジア太平洋戦争開戦から半年後、日本軍は敗戦を重ねるようになり、一九四四年七月七日、ついにサイパン島が占領されました。「サイパンの次は沖縄だ」と判断した軍の要請で、政府は奄美大島や徳之島、沖縄県の年寄り・子ども・女性を島外へ疎開させる指示を出します。

七月十九日、県は「沖縄県学童集団疎開準備要項」を発令し学校単位で疎開事務をすすめます。多数の兵士が沖縄に移駐し大量の食糧が必要になり、足手まといになる民間人を県外へ移動させることは急務だったのです。いっぽう子ども達は「ヤマトへ行けば汽車にも乗れるし、雪も桜もみることができると修学旅行気分ではしゃいでいました。」

二、対馬丸の出航と撃沈、漂流、救助

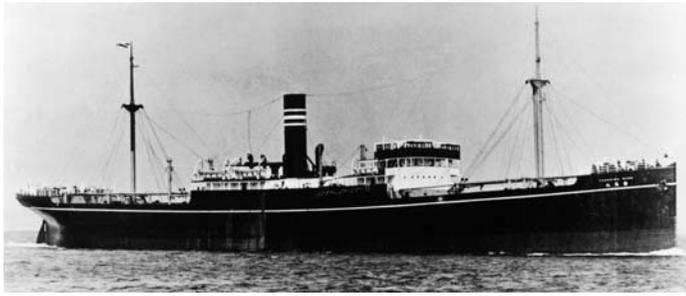
対馬丸（六、七五四トン）は、一九四四（昭和十九）年八月二十一日夕方、疎開学童、引率教員、一般疎開者、船員、砲兵隊員一、七八八名を乗せ、同じように

疎開者に乗せた和浦（かずうら）丸・暁空（ぎょうくう）丸と護衛艦の宇治（うじ）・蓮（はす）を含む計五隻の船団を組んで長崎を目指し出航しました。しかし翌二十二日夜十時過ぎ、鹿児島県・悪石島の北西十キロメートルの地点を航行中、米潜水艦ポーフィン号の魚雷攻撃を受け対馬丸は沈められてしまいます。建造から三十年も経った老朽貨物船・対馬丸は航行速度が遅く、潜水艦の格好の標的だったのです。

ほとんどの乗船者は船倉に取り残され、海に飛び込んだ人も台風の接近に伴う高波にのまれました。犠牲者数一、四二二名（二〇一九年一月現在氏名判明者数）。イカダにすがって漂流した人々は、付近の漁船や海軍の哨戒艇に救助されたほか奄美大島まで流されるなどして生き延びたのです。

三、「対馬丸」のその後

救助された人々には「箝口令（かんこうれい）」がしかれ、対馬丸が撃沈された事実を話すことを禁じられました。そのため犠牲者や生存者に関する詳細な調査も行われず、沖縄に残された家族に正しい情報が伝わることはありませんでした。また十・十空襲、翌年の地上戦などさらなる戦争被害を被ったため、対馬丸撃沈事件が知られるようになったのは戦後しばらく経ってからでした。



目次

対馬丸撃沈事件とは	2
「序」にかえて 高良 政勝	4
証言一 糸数 裕子 (旧姓石川)	5
証言二 新崎美津子 (旧姓宮城)	27
証言三 Y・M	33
附 録 〈記録と証言 あゝ学童疎開船対馬丸より転載〉	
証言四 田名 宗徳	38
証言五 当間 重善	47
取材を終えて 池宮 照子	50

「序」にかえて

引率訓導たちの対馬丸

財団法人対馬丸記念会会長

高良 政勝

対馬丸撃沈の悲劇は帰らぬ人となった多くの学童や、一般疎開者のみではない。

引率訓導（教師）たちの証言記録を読み、六十五年たった今でも訓導たちの戦後は終わってないことを実感した。「誰にも知られず、あの地平線の下で生きていたい」「今でも寝付かれない夜は声が聞こえてきます」「自分の子供は帰ってこないのに、引率した訓導はもうのうと生きている」「引率した生徒たちのほとんどが助からなかったのに、教師であった私が生き残ってしまったのですから、沖繩へはもう帰らない」と他府県でそっと息を潜めてつらい六十五年の日々を送った元訓導たち。今回の証言記録出版に際して、名前が出る事で自らの事がふたたび目の目を見るのはつらいから、インシャルにして下さいとおっしゃった、Y・Mさんをはじめ、しづる親御さんを説得し大勢の子供たちを対馬丸に乗せた訓導たち。疎開は国策だったとはいえ、子供たちの犠牲の責任を一身に背負い、辛いいばらの道を行ってきた訓導たちの六十五年。

疎開先では子供たちの親代わりとして日夜食料探しに奔走。全ての物資が不足していた戦時中、食べ盛りの子供たちを抱え、食料調達にどれほど苦労したことか。疎開先での子供たちの生活は「ヤサン（ひもじい）」そして、「ヒーサン（寒い）」さらに「シカラサン（淋しい）」だったと言う。暑さ真っ盛りの八月に沖繩を出発、二、三ヶ月で帰れると思っていた疎開は長期に及び冬を迎える。訓導たちは食に続き、子どもたちの衣の世話もしなければならぬ。併せて疎開先での偏見と蔑視。教師としての訓練は受けたものの、日常生活の経験の少ない二十歳を過ぎたばかりの若い訓導たちにとって疎開はあまりにも過酷な日々であった。

六十年余沈黙していた新崎美津子さんは、「私が対馬丸のことを話さなければ、死んでいった子供たちがかわいそうだ。…神様のような無心な子供たちの死をむだにしないために…」とやっとう口を開くようになった。しかしいまでも「…こうして請われるまま

に話をしたものの、私の話したことが対馬丸記念会の遺族や関係の方の心にどう響くのか、あるいは気持ちを害するようなことがあったらと不安でなりません」というY・Mさんのように対馬丸にふれるのも怖がる方もいる。多くの事を語っていただいた、糸数裕子さんはまるで昨日の出来事のように子供たちの様子や当時のことを話される。しかしクラスの子が一人も助からなかったという哀しみをずっと抱えてこられた。

六十五年という歳月がたった今、九死に一生を得て助かった訓導たちの多くが学童疎開のことを語ることなく、子供たちのもとへ逝ってしまった。いま、残された訓導たちに口を開いてもらわねば永遠に彼らの苦悩を直接聞くことができない。対馬丸記念館開館五周年、事件から六十五年経った今年しかないと、残された訓導たちにつらい疎開の思い出を語ってもらい、本書を上梓した。

附録として、「あゝ 学童疎開船対馬丸」（新里清篤編著 昭和五十三年八月二十二日発行）より、すでに故人となられた、田名宗徳、当間重善、両訓導の手記も併せて掲載した。疎開学童に加え、肉親も同時に失った訓導たちのつらい生涯は到底私たちの想像できるものではない。

今回、この小著を読む人に訓導たちの苦悩が伝わり、戦争と平和

について考える一助になれば、語ってくださった先生たちの心の重荷も少しは軽くなるだろうし、なくなられた訓導も安らかに眠られることでしょう。

刊行にあたって、糸数裕子さん、新崎美津子さん、Y・Mさんへの丁寧なインタビューを、証言記録としてまとめて戴いた池宮照子さんに衷心より感謝いたします。

平成二十二年 二月二十二日

私の生徒は一人も助かりませんでした。

寝付かれない夜は、声が聞こえてきます。

糸数裕子（旧姓石川）

大正十三年生まれ

■教員の子は教員に

昭和十九年三月に沖縄県師範学校女子部専攻科を卒業しました。師範学校では官費生として、毎月二十五円の奨学金をもらっていました。代用教員の給与が三十三円の時代で、二十五円は大金でした。その代わり、卒業後二カ年は教職に就くという義務がありました。奨学金制度は私が入学した年の四月か五月に国会を通過し、七月分までの四カ月分、百円が八月にまとめて支給されました。母は受け取りに必要な印鑑を手渡ししながら、「落トウサンキョー（落とさないでよ）、大事なものだから」と言い、「マーン、ノーラングトウ、ケーテイクーヨー（寄り道しないで帰って来なさい）」と送り出しました。戦前の学制では義務教育が六年で、その後は男子は中学校（五年制）、女子は女学校（四年制）に、あるいは国民学校に併設されていた高等科（修業年限二年）に進学しました。女学校の月謝は一円二十銭、高等科の月謝は二十銭だったと聞いています。もちろん、義務教育終了後、そのまま社会に出る生徒もたくさんいました。国民学校は、昭和十六年に従来の小学校を改め、「皇国民の基礎的錬成を目的とした」学校です。その際、教科書も変わりました。

国語の教科書は「ハナ ハト マメ……」（大正七年～昭和七年）、「サイタ サイタ サクラガ サイタ」（昭和八年～昭和十五年）から「アカイ アカイ アサヒ アサヒ」（昭和十六年～昭和二十年八月）へと変遷をたどります。

私自身、先生になりたかった、というわけではなくて、両親が教員でしたからごく自然に敷かれたレールに乗ったという感じですが、二歳年上の姉は東京の実践女子専門学校への進学を希望していたのですが、両親が承知せず、結局姉も教員になりました。祖母に言わせると「カーギグワーンアラワルヤ（器量がよければ）、山形屋の店員にもナイルスル（なれる）。イッターヤナー、カーギヌネーラングトウヤ（あんたたちは美人でもないからね）」ということでした。山形屋は東町にあった百貨店で、当時の若い女性の憧れの職場でした。元教員の母には、毎月送られてくる恩給がありましたから、「（あんなたちの）お母さんはこれ（恩給証書）があるから死ぬまで楽に生きられる」「年を取っても、あんたたちの世話になることもない」というのが祖母の口癖でした。布マチ（市）で古着の商いをして、苦勞して子どもを育てた祖母には、月給取りは理想の職業でした。

■天妃小学校時代

わが家は、私が小学生のころに父の赴任先から久米に移り住みました。田舎では、父兄が自分の家で穫れた物を届けてくれるので、お金を使うことがあまりなかったのですが、那覇ではなんでも買わなければならぬので、母はよく物価の高さをこぼしていました。

子ども心に「わが家はお金がないのかな」と心配したものです。

田舎の小学校からいきなり町中の裕福な家の子どもたちが多く通う天妃小学校に転入したので、その違いは強烈でした。天妃小学校では先生の服装より生徒の服装の方が立派でしたし、私は普段は洋服ですが寒いときには羽織を羽織って通っていたのに、周りは可愛いオーバーを着ていました。遠足のときなど、みな先生にお菓子を包んで持ってきました。何も知らない私が「あれなんねー？」と聞いたら、先生に上げるお菓子、とのこと。「知らなかった」というと、「では、私のものから持っていく」と包みから分けてくれました。

昭和七、八年当時、天妃宮の石門のところに「飛行機堂」というお菓子屋があって、きれいな包み紙に包まれたあめ玉など子どもの好きそうなお菓子を売っていました。包み紙は捨てずに、きれいにしわを伸ばして、宝箱にしまっておいたものです。石門というところは道幅が狭くて、家が建て込んでいて、自転車は通行止めになっているところで、どこかの学校の遠足という、店の前が混雑して通れなくなるほどでした。まもなく甘いものが手に入らなくなると、店もなくなっていました。

裕子
1 系数 証言

そういう土地柄ですから、進学を希望しない生徒は私のクラスで三名だけで、市場で商いをする漁師の娘たちでした。卒業後は南方へ働きに出ていましたが、無事に生きて帰ってきて、戦後は那覇のマチグワー（市場）でカマボコを売っていました。市場を歩いているなら、カマボコを売っている女性から「石川（旧姓）さん」と声をかけられ、なかなか思い出せないでいたら「タケよ、タケ」「えっ、

あんた上原タケね」という再会でした。昔のままのくったくのなきで、「エー、ワンネーフルイトンドー（私は背が高くなったのよ）」と少し高くなった壇の上で立ち上がって見せます。下りてもらって、並んで立つてみると、やはり背が高くなりました。進学しなかった三名のうちの一人、金城キヨちゃんも同じようにカマボコを売っていました。教員の娘は教員になり、漁師の娘は漁師に嫁いだわけです。以来、店の前を通るとチキアギを二、三枚包んでくれたり、丸カマボコをもらって、その日の夕飯のおかずになりました。残念ながら二人とも早く逝ってしまい、「苦労したんだね」と思ったものです。

■県立一高女から師範学校へ

天妃小学校から県立一高女に進学しました。そこから師範の二部（一部は高等科から進学した人を対象にしており五年制、二部は女学校を出てから入るので二年制）に入って、さらに専攻科（二年）を出ました。師範学校に入ってからからは、内兼久山（那覇市久米の沖縄県青年会館付近）にできたばかりの県立図書館でも勉強しました。当初、教員は戦地へ行かない、と言われていましたが、戦域が広がると、教員も召集されるようになりました。そのため教員が不足ぎみになり、一期上の師範二部は定員七十名で二学級ありました。私のときは一学級に戻って、定員四十名でした。

シナ事変（昭和十二年）が勃発した年は女学校一年生でした。その頃までは、オペラ歌手の藤原義江や偉い学者の先生が本土から

やって来て、学校で公演や講義を聴く機会もありましたが、三年生になると戦時一色でした。

ダンスの時間といつても体操のような威勢のいいものとなり、女学校入学当初は「ヴォルガの舟唄」を歌っていたのに、それも勇ましい軍歌に変わっていききました。夜中の十二時に女学校を出発して徒歩で勝連半島を目指す、という強行軍指導もありました。

私が七歳のときに満州事変が起こり、物心ついてからずっと軍国教育を受けていますから、「日本が戦争に負けるはずがない」「お国のために闘うのは当たり前」と思っていました。「吼えろ嵐 恐れじ我等 見よ天皇の燦たる御稜威（みいつ）……」などという歌を訳も分からず歌っていました。当時、町なかで民謡を歌う人はいませんし、歌と言えば、学校唱歌かラジオから流れる歌でした。ラジオがある家は少なく、ラジオ屋の店先で下駄をお尻に敷いて座り、聴いたものです。親戚のおじさんが上海事変（昭和七年）で戦死しましたが、戦争はまだ遠いところの話でした。

師範学校でも『訓練精義』という本が推奨され、訓練という言葉が頻繁に使われました。学問もなんでも反芻して修得するものすべて、努力ではなく訓練でした。師範学校生は『訓練精義』を必ず読むように、と言われていましたが、一円五十銭もしましたから気軽に買って読めるものではありませんでした。図書館にも三冊くらいしか置いてなくて、私は母にバス賃だのなんだのと嘘をついて貯めたお金で購入し、勉強しました。

昭和十八年には那覇港に接岸していた日本軍の船内で爆発が起こ

り、師範学校の教室の窓ガラスが割れるほどの衝撃でした。那覇の港には煙りがもくもくと上がり、戦場さながらでした。その後、窓ガラスが割れないようにと、美濃半紙を長く切ってガラスに張ったものです。新聞やラジオでは、いつも「勝った、勝った」の報でしたが、一方では戦地から遺骨が送られてきますから、出迎えの港で「海行かば」もよく歌いました。

■戦時下の生活

真珠湾攻撃（昭和十六年十二月八日）の少し前くらいから、米や裁縫の材料が手に入りにくくなりました。「生活必需物資統制令」が施行され、物資は配給制になりましたが、配給の切符はあるけれど、物がないので買えない、という状況でした。針と糸がなくなり、マッチがなくなり、と生活必需品がどんどん姿を消していきました。

昭和十七年くらいから沖縄の近海で輸送船が撃沈されることがあつたようです。母は国防婦人会の地域の会長をしていたのですが、ある時、床下に転がっているような、すり減った下駄でいいから鼻緒をすげ替えて持つてくるようにという通達がありました。「こんなシッピラコー（すり減った）下駄を」と不思議に思ったのですが、母は外から帰つてくると「大きな声では言えないけれど、船がやられて、どこそこに人が収容されているようだ。その人たちの履く下駄だそうだ」と話していました。遭難者は世間と隔離され、聞くところによると、そのときは波上にあつた性病専門の病院の空き部屋に収容されていたそうです。

当時は普通の家には電気が一本しかなく、電線が長く伸びていて、ご飯を作るときには台所に、食事をするときには居間に持つていつて使っていました。やがて電気会社に石炭が入って来なくなったので、夜の点灯も何時間と制限されるようになりました。那覇の商店街には電飾（イルミネーション）があり、陳列棚にも電気が煌々と照らされていましたが、「明るさは敵。欲しがりません、勝つまでは」のスローガンとともに、だんだん暗くなっていきました。

防空壕も各家庭で作るようという指示があり、畳を起こして床下に掘りました。地面が硬くて掘るのが大変でした。父は具志頭村（現八重瀬町）に単身赴任をしていたので男手がなくて、弟はまだ小さくて、私はすぐ貧血を起こしたので、結局、姉と母とで作った防空壕です。一度だけ空襲警報が発令されてそこに隠れたことがあります。しばらく入っていたら気持ちが悪くなり、「もう死んでもいいから出る」と言っ出て出たことがあります。

その後、隣の家の敷地に一坪くらいの防空壕を掘らせてもらいました。柱を真ん中に立てて、穴の入り口には東市（マチ）で古着商売をしていた祖母の売れ残りの着物を被せ、それからむしろを被せ、最後に土を被せました。ビニール・カバーというものが無い時代で、むしろも貴重品でした。この防空壕には入らないうちに疎開しました。

■那覇国民学校訓導に

昭和十九年四月に那覇国民学校の訓導になり、高等科二年を担当しました。専攻科を出た私の初任給は五十八円でした。訓導は正規の教員を指し、臨時の講習を受けて教職に就く教員は代用教員と呼ばれていました。代用教員は男の先生が戦地に赴いた後の穴を埋めるための措置で、比較的低学年を対象に採用され、講習も遊戯講習などの実習が多かったようです。

母から聞いた話ですが、昭和五、六年ごろ、昭和恐慌のおおりで学校に通えなくなる生徒が増え、教員が余ったとのこと。そこで国の制度が変わり「恩給を付けるので、夫婦で教員をしている世帯は一人は辞めること」となったため、母は三十七歳で退職したそうです。

那覇市内で高等科があるのは那覇国民学校だけでしたから、生徒は壺屋や牧志、住吉町からも通っていました。男子と女子は、校長室を境にして校舎は別でした。校庭にはセンダンの大木があり、夏になると蝉の鳴き声に悩まされました。あまりのうるささに棹でもって追い払うのですが、しばらくするとまた鳴き出す始末。本当にやかましくて閉口しました。校庭にはまたパンヤノキがありまして。三月の初めごろ真っ赤な花を咲かせ、入学式のころになると果実の白いワタ状の繊維がとびかうので、「那覇国民学校の」卒業式のあいさつには決まって『パンヤの花に送られて卒業します』という文言が入り、入学式には『パンヤのワタが……』とあいさつに登壇するのだ」と赴任まもないころ、先輩の先生から教えてもらいま

した。それからわずか半年後、校舎もセンダンの木もパンヤノキも空襲で焼けてしまうことになるとは……。

職員室には大きな世界地図が掲げられていました。日本軍が占領した地には○印が付けられ、戦況はもっぱらその世界地図で把握していました。昭和十九年三月二十二日に南西諸島の防備のため、大本営直轄の軍として第三二軍が創設され、六月下旬以降増強されていきますが、その矢先の七月七日、サイパン島の玉砕の報が伝えられます。私も生徒たちにサイパンがやられたという話をした記憶があります。

那覇国民学校でも五、六月からは四日に一度のローテーションで、小祿の飛行場づくりの動員がありました。兵舎をつくる瓦運びで、飛行場の入り口に置いてある山と積まれた瓦を六枚ぐらいつつ頭に載せて、飛行場の真ん中まで持つていく作業です。重たくて六枚がやっとでした。教員も同じように作業しました。その日の作業を終えて学校へ戻ると、校長先生が決まって校門で迎えてくれました。そして「ご苦労様でした」と深々とお辞儀をされるので、それだけで疲れが取れるような気がしたものです。

■疎開へ

疎開の話は軍や県の上部では進んでいたと思いますが、実際に通達されたのは七月九日でした。七日にサイパンが陥落して二日後に疎開令が出ています。那覇の商店街では鹿児島出身のいわゆる寄留商人が多かったので、店を閉めて郷里に引き揚げる人が多く、通り

は閑散としていました。

具体的に疎開の話が出たのは八月になってからのことです。そのころ、姉とニュース映画を見にきました。映画というとニュース映画しかない時代です。日本の戦況を伝える映画を見ての帰り、姉が独り言のように「疎開しないといけないね」とつぶやきました。「沖繩にいたらあぶない」と感じたようです。新米教師の私は、毎日、明日の授業はどうしよう、ということだけしか考えていませんでした。新聞に目を通す余裕はなく、もっとも新聞を見ても肝心なことはなにも書かれていません。天気予報さえも載っていませんでした。姉は映画で大きな格納庫が一つの爆弾で跡形もなくなる様子にショックを受けていました。

上山国民学校に在職していた姉は、早い時期に学童疎開の引率で行くことが決まり、母と弟二人、それから母方の祖母が姉の家族として同行することになりました。船は潜水母艦「迅鯨」で、八月十四日の夜中の出立でした。

気軽に旅行するという時代ではなかったので荷物を入れる物がなく、母は筆筒の引き出しを二枚重ねて、それに畳の皮を剥いだむしるを被せ、紐で結わえました。三月には帰るつもりで疎開ですから、荷物も最小限で、トートバッグも台座は残して、札だけを抜いて持って行きました。疎開先では、持っていった引き出しに合わせて枠だけ作ってもらい筆筒にし、沖繩に引き揚げるときは、娘二人がお嫁に行くときに筆筒を持たせると言って、木材を持って帰りました。昭和二十三年に結婚するとき、まだものがない時代でしたけれど、

お陰で筆筒を持ってお嫁に行くことができました。今でも大事にしています。

姉たちの疎開が決まると、本来、新卒は対象外でしたが、私も後から引率で疎開することになりました。私一人、那覇に置いておくのが気がかりだったようで、父が友人でもあった那覇国民学校の渡嘉敷真睦校長に頼み込んだのです。

疎開に当たっては、子どもに布団や衣服を余分に持たせることができるかどうか、というハードルがあり、まず布団が余分にある旅館の子どもたちから疎開を進めては、という話が職員会議で出ました。職員会議は放課後六時七時まで続き、電気もない時代ですからろうそくを付けて話し合われました。

私も自分のクラスの中から子どもを疎開にやれそうな家を訪問して、「三月には帰ってきますから」と疎開を勧めたわけです。やはり学級担任が引率するとすると、親もその気になったと思います。二十歳の私は生徒のお姉さんのような気持ちで、瓦運びの作業のときも、小柄な生徒の瓦を「先生が一枚持ってあげよう、重いでしょう」と持ってあげたりしていましたから生徒も慕ってくれ、結果的に五十名中十三名が行くことになりました。けれど私のクラスの子は一人も助かりませんでした。

裕子
証言 1 糸数
母たちが疎開した後、一人残された私は、それまでご飯を炊いたことがなかったので父からご飯の炊き方を教えてもらいました。父は単身赴任でしたから炊事は慣れていました。竈で煮炊きするのはけっこう難しく、煙にむせながら母や姉が恋しくて泣きながら食事

の支度をしていました。

母たちと一緒に疎開したのは母方の祖母で、息子がガダルカナル（ソロモン諸島）に出征している父方の祖母は、巷で南方の兵隊が近々台湾や沖縄に帰ってくる、といううわさが流れていたことから、息子が帰ってくるかもしれないから行かない、と残りました。戦時中、父は赴任先の具志頭へ親族を引き連れて行っています。戦争がひどくなると玉泉洞のすぐ近くの新里ガマに避難したそうですが、そこは水が流れていて、豆腐を作って食べたり、ヒージャーを屠殺して食べたり、できたそうです。当時、慢性腹膜炎でいつもおなかを痛いといっていた伯母はどうせ戦で死ぬのだからと毎日、弾の間をくぐっては食糧を取ってきて食べていたそうです。もう齢九十を越しましたが元気でいます。

■昭和十九年八月二十二日

八月二十二日の対馬丸乗船当日は、朝の四時ごろには港に行っています。不安はまったくありませんでした。集合時間の四時半はまだ暗く、夜は明けていませんでしたが、港はすでに人でいっぱいでした。どこに集まればいいのか、わからずに港中をあちこち歩き回りました。日が昇ると、炎天下で何回も集合、解散が繰り返されました。港には水がなく、喉が渴いて困りました。あわてふためいての疎開ですから、旗も太鼓も用意がなく、ようやく自分の学校の生徒を集め、列を作らせて待機させ、船に乗せました。

那覇国民学校は、十三名の訓導の引率で三八〇名の生徒が乗船し

あちゃん、かあちゃん」と言うのと、女の人は「ター子、ター子」と声をかけてお尻をたたいていました。この母子は私と一緒に救助されました。

夜が明けてまもないころ、上空に飛行機が見えたので、筏の上に男の子を立たせて、飛行機に向かってシャツを振らせました。驚いたことに、沈没直後はあんなにたくさんいた人たちがどこにも見えなくなっていました。そのうちに、丸太にまたがって漂流している人が「オーイ」と声をかけてきました。だれかが筏にくくりつけてあった救命具を投げていましたが、波も高かったので届いたかどうか。

あれから六十五年が経ちました。忘れようとしたこともありませんが、今でも鮮明に思い出すことができます。暗い海に筏がたくさん浮かび、人がちよこんと座っていました。そして、あちこちから叫び声が聞こえてきました。今でも寝付かれない夜は、声が聞こえてきます。

その日の、夕日が沈むころ、漁船に救助されました。暴風の余波で波が高かったのですが、近づいてきた漁船から棒が下りてきて、それにつかまって一人ずつ上っていきました。よくぞ上れたと思います。半分くらいまで上ると、船のうえから引き上げてくれました。甲板に倒れ込むと、そのまま気を失っていたようです。やがて起こされて、船尾の広いところに連れていかれました。「字の書ける人は名前を書いてください」と紙が回ってきたので、「私が書きます」と言って、十四、五名の名前を書いた記憶があります。一緒に助け

られたのは子どもを負った女の人と、船舶兵、それと子どもたちでした。それから生簀のそばに寝かされて、目が覚めたら魚の味噌汁が用意されていました。すぐくおいしくて、「もう一杯もらえませんか」と言うと「今はそれだけ」と止められました。甲板は寒いので船倉に下りて横になっていると、「もう鹿児島湾に入っているよ」と聞かされ、初めて「助かった」と思いました。

■鹿児島島の旅館に収容

山川港には周囲に網が張られ、見物人が大勢いました。救助された人たちは浜辺に座り込んでいて、炊き出しのおにぎりが配られていました。私も一つもらいました。具合の悪い人は病院へ、元気な人はこれから鹿児島へ行く、とのことで「どこか痛くないか」と聞かれ、片方の手が動かなくて、痛かったけれど、「痛くない」と答えました。鹿児島へ行けば誰かに会える、という気持ちがありました。

市内では春本旅館というところにいました。そこで見舞金として一人一円が支給されました。たまたま出張で鹿児島に来ていた当間重民那覇市長が、那覇の学童が遭難したと聞き、心配したものと聞いています。一円は大金でした。外出は自由で、支給された一円があるのです。子どもたちはよくカライモを買いに出かけていましたが、決まって特高（特別高等警察）が後を付けていました。よそでどんな話をするか、後ろで見張っているのです。「外で船が沈んだ話としてはいかん」と箝口令が布かれていました。

子どもたちはカライモの他に慰問袋の袋を買ってきました。慰問袋は出征兵士に物資を送る際に使われる袋で、そんなものぐらいしか、もう店には置いてなかったのだと思います。人造絹糸で織られていて、味噌汁でもこぼさうものならすぐにヒーター（ゴキブリ）に食べられてしまうようなしろものです。学生服もそんなものので作るので、当時の中学生の制服はみな穴が開いていました。慰問袋の値段は十枚で一銭とかそんなものだったので、私はそれを三十枚か四十枚買いにやりました。それを解いて（すぐに解けました）男の子にパンツを縫ってあげました。漂流中に着ているものを波にさらわれ、裸の子もいました。旅館の人に糸をもらおうとしたら、貴重品ですから向こうはけんか腰でした。私にはやり合う元気はなかったのですが、代わりに同宿のおばあさんが怒鳴り返してくれ、しぶしぶ「使ったら返して」と渡してくれました。はさみを使わずに慰問袋を二枚つなげ、紐はそのままパンツの紐にしてできあがりです。できあがったパンツには「慰問袋」と大きく赤く書かれています。旅館に滞在中、一般疎開の引率で先に来ていた母のいところが見舞いにきてくれました。沖縄行きの船はしばらく止められていたようです。また、父の友人で、当時県の学務課長をされていた新崎先生の奥さんが、大きなアルミの弁当箱に塩味のカステラを持ってきてくれました。砂糖がない時代ですからカステラも塩味でした。涙が出るくらいうれしくて、さっそく子どもたちに分けてあげていたら、「少しは残しておきなさいよ」と耳打ちされました。

同じ筏で漂流した子連れの女の人は旅館も一緒でした。女の人の

のもんぺが破れていたもので、私の着ているもの一枚を貸していたのですが、「譲ってほしい」と言われ、困りました。私は那覇を出るときに、シミーズにワンピースを着て、さらに薄手のもんぺを二枚はいていたので貸すことができたのですが、それでも、これから先どうなるかわからないし、譲るのを躊躇していたところ、小学校のときの恩師の奥さんが着替えのパンツを持って旅館に訪ねて来てくれました。「これがないと困るでしょう。新しいのはないけれど」と言って、黒いパンツと洗いざらしの白いパンツをもらったので、その一枚を譲ってあげました。パンツといっても、当時のパンツはサルマタ式の丈の長いものでした。

戦後何十年か経ち、小祿中学校に勤務していたころ、通勤のバスから寄宮の大通り沿いに「有佐（ありさ）」という名前のそば屋を見つけました。熊本に有佐という地名があり、そこに沖縄からの疎開者がたくさんいた、と聞いたことがあったので、なんとなく気になっていました。ある日、帰宅途中のバスでトイレに行きたくなかったので、途中下車してその店に入りました。トイレを貸してもらい、注文したおそばを食べながら、有佐という名前が前々から気になっていたもので、「戦争中は熊本にいたの？」と聞いてみました。すると、「ワンネーヤー（私はね）、沈没船の生き残りよ」と話し出したのでびっくり。なんと、一緒に漂流した女の人でした。向こうも私のことを覚えていてくれて、「あんたからサルマタをもらったよね」と話していました。背中に負ぶっていた女の子は、大阪に嫁いだとのことでした。

■山川の肥後病院へ

旅館で落ち着かない日々を送っていたところ、山川の肥後病院に那覇国民学校の仲村渠ツル先生がいると聞いて、無性に会いたくありません。旅館では教員は私一人でしたので心細く、病院の方でも怪我をした生徒がたくさん収容されていて手が足りないのでも来て欲しい、とのことでした。仲村渠先生は、高等科二年の受け持ちで、私より五期先輩でした。

西鹿児島駅まで係の人に送ってもらい、切符を渡され、山川行きの汽車を待っていたのですが、いつまで経っても目当ての汽車が来ません。汽車は来るけれど、行き先が違います。とうとう改札口に行つて、「この汽車に乗りたいたいですけれど、来ないんです」と言う、「指宿(いぶすき)線やがな」という返事でした。私は「シシユク」と読んでいたので、「いぶすき」のアナウンスを聞いても違う線だと思ひこんでいました。あと三分でくる、と言われて無事乗り込みましたが、着いたのはもう夕方でした。汽車を降りると、そこから船で渡るように、とのこと。「船は怖いからバスに乗ります」と言うとな変な顔をされました。船だと目と鼻の先で無料ですが、バスだと遠回りの上、有料でした。

裕子
証言 1 系数
病院では、入院している生徒の世話と包帯巻きが主な仕事でした。包帯は使い捨てではなく、洗ってまた使います。使用済みの膿や血が付いた包帯を大鍋で煮て煮沸していましたが、鍋の中で、包帯がマグルマグルになって(もつれて)しまうので、乾いた後、一本一本もつれをほどいて巻き直さなければなりません。包帯を巻いてい

る間は何も考えないでいられたので、むしろ楽しい作業でした。病院には九月六日までいました。

入院している学童は二十名くらいで、その中にツハヨシツグ君がいました。かわいそうに右手が曲がっていて、しばらくして県病院に転院しました。那覇国民学校高等科二年の伊是名興良君もいました。瑞慶覧という女の子は足を怪我していましたが、ちゃんとした薬がないのでなかなかよくなりませんでした。中にひときわ小柄な仲田清一郎君がいました。天妃小学校の三年生でしたが、最初は一年生かと思つたくらいです。仲田君の世話は私の担当で、衰弱しているのでトイレにも抱っこして連れていっていました。仮死状態で船に引き上げられ、死んでいるといつて海に投げられたところ、そのシヨックで生き返つたそうです。仲田君に「ヤマト(本土)にだけか(親戚は)いないの」と聞くと、最初は「わからん」と言っていたのに、ふと思ひ出したのか「税務署にニイニイ(兄さん)がいる」と言うではありませんか。税務署なら探せるのでは、とすぐ病院長に報告しました。さっそく調べてくれて、数日後、熊本県宇土から兄さんが迎えにきました。「歩けませんよ」と言つたのですが、「二日しか休暇を取っていないので」と負ぶつて、引き取つていきました。そのお兄さんは戦後、銀座で税理士を開業して成功し、東京の沖繩県人会の会長をしていました。清一郎君も埼玉で税理士をしています。

■母、姉と再会

肥後病院は個人経営の病院でしたが、軍が接収していました。院長先生はいるものの、軍医が采配を振り、病院の入り口には兵隊が銃剣を持って立っていました。二階は入院室になっていて、部屋もたくさんありました。院長先生の住宅は別棟になっていて、夕食時には母屋から六十がらみの女中さんが毎日呼びに来ました。病院の玄関脇から庭を通っていくと大きなミカンの木があって、私たちが通ると、木の上のハブ（へび？）が木から木へ頭上を飛ぶ気配がしました。初めはびびくりしましたが、同行している女中さんは動じる気配を見せず、「あなたたちはいい人だから、噛みつきません」と言っていました。院長先生は背が高く、貫禄のある、やさしい方でした。

病院の向かいは小学校でした。教室のガラスは目張りされていて中の様子はわかりませんが、教室から聞こえてくる「必勝祈願の朝参り 八幡様の境内で……木刀振って」などの歌声に慰められていました。九月に入ってまもなく、日課である包帯を巻き終え、二階の窓からふと外に目をやると、姉らしい人が通っていくではありませんか。思わず身を乗り出して、大きい声で「姉さん」と声をかけると振り返りました。姉は母と一緒に私を訪ねてきたけれど、病院の入り口で「そんな人はいない」と言われ、帰るところでした。私はすぐにかけて下りていって、母と姉に会わせてもらいました。

姉の話によれば、何日経っても音沙汰がないので心配をしていたとのこと。周りの先生方は事情を知っているようで、姉が職員室に

足を踏み入れると会話がぴたと止まったそうです。妹が那覇国民学校の引率で来る、という話はしていたので、船がやられたらしい、という話を姉の耳に入れないようにしていたものの、とうとう、もうこれ以上は隠せない、話してくれたそうです。姉はまず、母にどう伝えようか、と思ったとのこと。祖母もいるので家の中ではまずい、と母を誘い出し、宮崎市内を流れる川にかかっている橋橋のたもとで「みっちゃんの船は沈んだんだったよ」と話したところ、母はその場に座り込んでしまったそうです。

家に戻ると母はすぐに姉の小さなトランクに荷物を詰め、夜が明けるのを待って、二人で鹿児島に向かいました。疎開先での母は、一七名の学童の世話係ですからそう簡単には出られません、娘の船が沈んだというので、確かめに行ってくる」と言って出してもらいました。まず、県事務所を訪ねると、「石川（旧姓）先生という若い女の先生が、山川港にいる」と教えてくれたのだそうです。

■宮崎県の加久藤へ

九月六日に、先に対馬丸とは別の船で疎開していた謝花先生が迎えにきて、那覇国民学校の疎開先である加久藤（現宮崎県えびの市加久藤）に向かいました。鹿児島から汽車に乗り、途中、吉松という駅で下車し、乗り換えの吉都線を待っていたときです。子どもたちは鹿児島で支給されたベラベラの学生服に半ズボン姿、ワラ草履を履き、歯ブラシと歯磨きの入った慰問袋を持っているだけのみすばらしい格好でした。高等科二年生で、みな私より大きい子たちで

した。プラットフォームで男の人が謝花先生に声をかけ、私たちの事情を知ると、「沖縄から戦争を避けて来たそうです。見ての通り、とても疲れているようですから、どうぞ席を譲ってください」と呼びかけてくれました。すると、みな立ち上がって子どもたちに譲ってくれました。その方も教員で、兄弟の家を訪ねる途中とのことでした。

それから、その方が「汽車が来るまで時間がありますから、ちょっと」と、駅の向かい側にあった食堂に案内してくれました。食堂といっても、ろくな食べ物はない時代です。カライモ団子という一見ぜんざいのような、芋飴で甘みをつけて、カライモの大きいの小豆が入ったものが出てきました。これが本当においしかった。

さらに、その方は、別れ際にこの地域で採れる尻のところがった青柿を「みなさんに上げます」といって持たせてくれました。兄弟のところへ持っていくつもりだったと思います。オオクマという名前は覚えていますが、どこの学校の先生だったかもわからず、それっきりです。

疎開先の加久藤からは、霧島山がよく見えました。折に触れ、この山を見上げては「やっぱり山は動かない」と思ったものです。

疎開先にはそれぞれ事情があり、加久藤に配置された那覇国民学校の生徒たちは、他の地域に比べ不遇で、かわいそうでした。宮崎は沖縄から行くと思いのほか寒いところで、昭和十九年の冬は三十八年ぶりの大雪の年だと言っていました。生徒たちは肌シャツを持たず、いつもがたがた震えていました。幸い私は、父が若いと

きに買った毛糸の上等のシャツを、「みつちゃん、これを持っていきなさい」と持たせてくれていました。ずっと私が着て、縫い返してうちの息子にも着せました。

生徒のしもやけには、近くの豆腐屋で豆腐の汁をもらって塗っていました。お湯でもよかったのですが、粘度のあるものを塗るといい、と教えられました。腫れて膿が出るほどひどくなった生徒はリヤカーに乗せて、山道を引いて病院まで行きました。眼科の病院でしたが、なんでも診てもらっていました。

幸い寝具は敷き布団と掛け布団が受け入れ先で準備されていました。地元の婦人会が総動員で作ったそうです。

昭和十九年十月十日の那覇大空襲が、「那覇市灰燼に帰す」という見出しで新聞に大きく出たときはショックでした。沖縄はどうなっているのか、父は大丈夫だろうか、と心配しました。ひと月ほど経って、郵便局から父の給料が送られてきたので無事がわかりました。

当初、那覇市内の学校の生徒は全員宮崎市内に入る予定でしたが、市内でも空襲があり、沖縄から疎開した生徒が一人亡くなったことから、姉のいた上山国民学校の生徒たちは、宮崎市からえびの市に再疎開しています。

■加久藤での暮らし

加久藤での私の仕事は生徒たちの世話係（食事係）でした。対馬丸で本来の世話係の人が遭難したので、やらざるを得ませんでした。

私のクラスの子どもたちはだれも助かりませんが、対馬丸で生き残った二十五名と、対馬丸より先に謝花先生の引率で疎開していた八名の計三十三名を預かりました。ところが、こんな非常時でも規則は規則で、一学級四十名と決められており、三十三名では国から疎開の費用が出せないとのことでした。そこで、一般疎開で近くに来ていた沖縄の子を入れて、数合わせをしました。生徒たちと一緒にご飯を食べるのは仲村渠ツル先生、謝花先生、私の三名で、主任として本来生徒たちの面倒を見る立場にある当間重善先生は、家族も一緒に疎開していたこともあり、宿舎にはめったに顔を出しませんでした。

加久藤は郵便局や営林署がある比較的大きな村で、村の人たちにはよくしてもらいました。村長の西田和民さんは、着いた当日、「女の先生お二人は、生徒と一緒に寝起きするのはお気の毒ですから」と、生徒たちの寝起きする教室のすぐ向かいにある家で寝泊まりができるようにしてくれました。出征軍人の家でした。翌日から朝は早く起きてご飯をつくりました。なにしろ四十名分のご飯など炊いたことがなく、村の人に教えてもらいながら、見よう見まねのぶつけ本番です。ご飯といっても、お米はわずかしかなかく芋が入ればいいほうで、ほとんど切り干し大根でした。

教室は渡り廊下でつながっていて、生徒たちが寝起きしているミシン教室の向こう側には校長室がありました。校長室の近くの廊下には学校行事の月例表が張り出されていましたが、ある日私が何気なく月例表を眺めていると校長先生が顔を出し、「沖縄さん、いい

です、いいです」とさえぎられました。新米ながら私は教師の仕事がしたくて、当間先生にはことあるごとに「いつまでもご飯炊きはしたくない。引率訓導として来たのだから、生徒たちに教えたい。食事づくりは別に人を雇ってください」と訴えましたが、まったく動く気配はありませんでした。当間先生自身は主任でしたから教壇には立たず、生徒の面倒を見るという役目でした。

校長先生の言動などから推測するに、加久藤では村は疎開を受け入れたものの、学校は拒否したのではないか、と思います。沖縄から来た生徒は、分校の先生が別に教えていました。地元の子と同じクラスに振り分けて、勉強させてほしかったと思います。言葉もわからない上に、冬の寒さも大変でした。せめて地元の子どもたちと交流があり、地元の先生たちが声をかけてくれたら、少しは暖かい気持ちになれたはずですが。校長先生からあまり親しくするな、という指示があつたようで、ナカマタという男の先生はときどき私のところにやって来ましたが、他の先生の姿が見えるときと帰っていききました。

あとでわかったことですが、受け入れ先の校長にも教頭にも四十円というお金が支給されていたそうです。ある日、当間先生から「置一枚についての宿泊費」が学校に支払われていると聞き、意を強くしてミシン教室を使う権利を主張しました。学校側から「(ミシン教室の)半分を使ってくれ」と言われていたところでした。また、ミシンを片づけようとしたので、「いえ、置いておいてください。生徒にはさわらせませんから」と言つてそのままにさせました。そ

のミシンで、生徒の服の補修をすることができました。裁縫の先生のホソノ先生はやさしい方で、「白い糸しかありませんが」とミシン糸を持ってきて下さり、「色はなんでもけっこうです」と有り難くいただきました。育ち盛りの生徒たちのシャツもパンツもよく破れました。

十一月の霽の降る日に、那覇国民学校の疎開者の荷物が港に着いたというので、私と謝花先生で引き取りにいきました。荷物は首里の学童が乗った別の船で来たもので、三〇〇名を越す人数分の荷物が、船会社の倉庫にずらっと並んでいました。疎開の際には一人二十キロまで持つことを許されていましたが、生徒たちの荷物はわずかなもので、荷物には学校名と担任の先生の名前の書かれた木札が付けられていました。その他、家族疎開の分の荷物も合わせて貨車三台分ほどあり、謝花先生と二人で積み込みました。持ち主が対馬丸で遭難し引き取り手のない荷物は、小学校の講堂の二階に五〇音順に並べ保管していましたが、寒くなるとその荷物が徐々に減っていきました。生徒たちがこっそり盗りにいくのです。着ているものが変わるのですぐにわかりましたが、「あいジンブン（知恵）があるさ」と見てみぬふりをしていました。寒いのですから無理もありません。あの（残りの）荷物は、あれからどうなったのだろう、とときどき思い出します。

■高崎新田へ転勤

昭和二十年の三月に北諸県郡高崎新田へ転勤の辞令が出ました。

私より早く謝花先生は熊本県との県境にある椎木という村に転勤になり、仲村渠先生は結婚退職をして、上京することになりました。生徒たちを当間先生に託して別れるのは、本当に後ろ髪を引かれる思いでした。

高崎新田では打って変わって大歓迎を受けました。学校の講堂で歓迎会が催され、井に小豆と芋の入ったぜんざいがふるまわれました。校長先生は「石川先生は沖縄県の士族の出だそうです。女子師範の専攻科卒業です」と紹介してくれました。そして「あなたには高等科を持たせたいけれど、先生が病休のクラスがあるから」と四年生の担任になりました。高崎新田には、那覇国民学校から山田先生が四十名の男子生徒を連れてきていました。二十年三月の最後の学童疎開船だったそうです。

四年生には桑の皮はぎの動員もありました。農家では養蚕をしていて、桑の葉を取ったあとの枝の皮を歯でむいて剥ぐ、という作業です。作業の後の生徒たちの口の周りは樹液で真っ黒になっていました。その皮を集めれば着るものの配給があると聞かされていましたが、とうとう一度もありませんでした。終戦後、駅の構内に生徒たちが剥いだ桑の皮がうず高く積まれて腐っていました。貨物車も石炭もないので積み出せなかったのです。

地元の高等科の先生方はほとんどが代用教員ということもあって、私のことを警戒していました。学校の外で会うと知らんぷりをするなど意地悪もされました。大久保教頭は気さくな方でしたので、「女の先生はちょっと変ですね」と言うと、「あんたが師範出だから

少しは意地悪するかもしらんけれど、免許がものをいうからね」と言ってくれました。

八月十五日はお盆で、私は久しぶりに母のところへ出かけました。会って近況報告をしていたら、川遊びに行っていた生徒たちが帰ってきて「兵隊が、戦終わったよ」と言うのです。母は「勝たないのに戦が終わるね。そんなことを言ったら憲兵につかまるよ」とたしなめました。ところが、姉も帰ってきて同じことを言うので、私は急いで高崎に戻りました。お盆なので学校は閑散としていましたが、講堂に兵隊が集まっていました。そこで終戦の詔を聴きました。生徒たちの様子を見にいくと、「戦争が終わった」「沖繩に帰れる」と喜んでいますが。中には、うれしさの余り、軒下に植えていたかぼちゃを叩いている子がいたので、「かぼちゃは叩かないで」と叱りました。あのころは、朝起きて夜寝るまで、明日は生徒たちになにを食べさせようか、とそればかり考えていましたから。

八月十八日ぐらいいから復員列車を見かけるようになり、都井岬周辺には兵隊がたくさんいましたから、どの列車もあふれんばかりでした。

敗戦の知らせは悲しかったものの、ほっとしたのも事実です。負けたか勝つとかではなくて、早く戦が終わって欲しい、と思っていました。着るものも食べるものもない生活にはうんざりでした。昼夜付けっぱなしのラジオが、「東部〇×発表、都井岬にB29が何機編隊で……」と雑音じりの警報を告げると夜中でも飛び起きなくてはいけません。私一人なら起きなかつたかもしれませんが生徒

たちがいますから、生徒たちを起こして、運動場を横切ったところにある壕まで走らせました。昭和二十年の六月に入ると毎日のように空襲警報が発令されました。

ある日、隊をはぐれたのか、米軍機が地面すれすれに飛んできたことがあります。パイロットの顔が見えるくらいの高さで、彼らにとってはゲームのような感覚だったのかもしれませんが。私は「生徒が死んだらどうしよう」とぞっとしましたが、生徒たちは訓練されていきますから「散れ！」と言うと、すぐさま下水口に潜っていました。本当にヌチトウカクガイ（命と引き替え）でした。敵機が去った後、生徒たちの頭数を数えると一人足りなかつたのであわてましたが、「こっちこっち」と出てきてほっとしました。あのころはいつも生徒の数を数えていました。

■高崎での暮らし

終戦を迎え、進駐軍が来ると大変な騒ぎになる、という噂で浮き足立ち、子どもはみんな隠れる、と言われていましたが、しばらくするとラジオから軽快な音楽が流れてくるようになり、都城の中学に進学していた子どもたちは「アメリカ兵がたくさん通るけれど、なんでもないですよ」と言っていました。

九月からは一年生の担任になりました。たまたま謄写版室に黒いインクと赤いインクを見つけたのですが、赤いインクは使った形跡がなく、ほこりを被っていました。一年生なら色刷りの方がいいだろうと、ずれないように苦心して二色刷りのおひな様のぬり絵を仕

上げ、それを授業で使ったところ、他の一年の先生から「先生が刷ったんですか」「こげんなことも出来つとね」とずいぶん感心されました。さつそく教頭先生の耳にも入り、「ああ、先生は一年生向きじゃねえ」と言われ、本当は高等科を希望していたので、内心困ったと思います。

担任になると父兄との交流があるので、あれこれと食べ物ももらえました。搗いたサツマイモに餅粉を入れた大きな団子を「はい先生、アタゲントコのダゴ（団子）」といって持ってきてくれました。次の日には別の父兄が持ってきてくれ、数が集まったところで生徒たちに持っていきました。農家の人は純朴でした。

十月に入り、高等科二年を担当していた先生が腎孟炎で学校を休むことになったため、その後を私が見ました。四十名の生徒の中には、師範学校や中学の受験生もいましたから一生懸命指導しました。その甲斐あって、翌年三月には師範女子部への合格者も出ました。

私に引率訓導手当が毎月四十円あるということは、高崎に来てから知りました。山田先生は先の先まで考える方で、ある日、「石川さん、あなたには引率手当というのが四十円あるけれど、それをもらわんでくれ」と言ってきました。その理由は「これから、（疎開で来ている）この子たちを高校に進学させないといけないけれど、汽車賃とかいろいろいる」とのこと。もちろん承諾しました。受験させたところ、都城工業高等学校に二名、都城中学に二名、計四名が合格しました。一人は後に琉大の教授になりました。満州に就職した子もいましたが、翌昭和二十一年の五月ごろ無事に帰って来ま

した。

高崎では私に結婚話もありました。教頭先生に「フクモリ先生をどう思うか」と聞かれたので「とても誠実みのある方ですね」と答えると、「あそこに嫁に行け、あそこは分限者（大金持ち）じゃつ」と勧められました。フクモリ先生に「遊びに行かんね、先生」と声をかけられたらすぐに出かけました。先生の家まで一里ぐらいあるので自転車で行き、帰りには自転車の後ろにリヤカーをつないで、じゃがいもや、蕨やタケノコの干したものなどをもらって帰ります。ある女の先生は「あなたはフクモリ先生と友だちだね」と言うので、「遊びに行ったらいろんなものをもらえるので」と正直に答えていました。生徒たちの明日の弁当をどうしよう、ということばかり考えていましたが、フクモリ先生の家に行けば、しばらく考えないで済みました。「借り作って」とも言われましたが、「何とでも言いなさい。ここにいる限りはなんとしても、なんでももらわないといけないのだから」と思っていました。色気より食い気でした。

高等科卒業後、進学や就職をしなかった生徒たちは、とりあえず、農家に作業員として預けていました。預けた子たちに会うと、「腹いっぱい食べているか」と聞くのが決まりでした。すると「昨日は何を食べてね。こんにゃくを作った」などと報告してくれ、「もらったこんにゃくを持ってくるの忘れた」と話す子には「もらったら忘れずに持ってくるのよ」と取りにやらせました。

■ 帰沖

「沖繩は全滅」と聞かされていたので父の安否を気遣っていたのですが、昭和二十一年の六月に、白砂糖が入った、一ガロン入りの石油缶のようなものが母のところへ届けられ、中に父の手紙が入っていました。その手紙で父の無事を知りました。糸満の人が所番地だけで届けてくれ、姉も、どのだれかも聞かず、ウチナーから来た、と言われて受け取ったそうです。戦後の混乱期に、密航船で宮崎の山の中まで届けてくれたのですから驚きです。汽車を降りて、さらに八キロくらい歩かなくてはいけないところでした。

引き揚げの話は昭和二十一年六月にあり、まず宮古島から疎開していた生徒たちが六月の末に帰りました。那覇は大所帯ということもあり、調査やら資料作成に手間取って、十月の末になりました。当時は、カーボン紙がないので、沖縄県事務所や文部省に提出する生徒たちの本籍やらなにやらの書類を作成するのが大変でした。四部用意するにも一枚一枚手書きです。授業を終えて後の放課後の作業でしたから、山田先生は「アチハティティナランサー（うんざりだ）」と音を上げていました。ペンがある先生はまだいいのですが、ペン先がなくて、鉛筆にインクをつけて書いた、という先生がいました。

引き揚げ作業のため、宮崎県内の引率訓導会議を行い、「では、これだけの書類を用意して、二日後に集まりましょう」と言うのと、松山小学校の先生は「二日後には、ぼくはまだ（疎開先に）帰り着いていません」と言っていました。延着が当たり前のような汽車を

乗り換え、さらに徒歩でやっと帰り着くような田舎にも沖繩の生徒たちは疎開していました。

沖繩へは学校単位で帰り、その際、帰還手当が一人当たり一〇〇〇円出ました。山田先生と小倉や八幡まで出かけ、生徒たちの沖繩へのお土産にとジュラルミン製の小鍋を買い、高崎の地元で焼いているマカイ（碗）を持たせました。宮崎を発ち、それから出航まで鉄条網が張られている鹿児島島の収容所に二週間くらい入っていました。ここは食糧事情が悪く、ご飯とおつゆとおこうごぐらいしか出ないので、お腹がすいて大変でした。金網ごしに地元の人がいろいろなものを売りに来ていて、子どもたちは帰還手当を持ってるので、空腹には勝てず、いろいろ買っていました。収容所では一人につき毛布一枚が支給されていました。出るときには本来置いていくべきものではありませんでしたが、沖繩へ帰ってからの暮らしを考えると必要なものであり、毛布を二つにさいて枚数を合わせ、その半分を持ち帰りました。

■ 父と再会

沖繩へは、高崎にいた那覇国民学校の生徒七名と中学に進学した四名を引率してきました。船は、まず那覇港に入りました。港では真っ黒に焼けた男の人たちが仲仕をしていて、最初は黒人かと思ったのですが、方言をしゃべるので沖繩の人とわかりました。ここでDDTを撒かれ、そこから久場崎のインヌミヤードウイに向かいま

上陸して案内されたところには、コンセットハウスの宿舍がずらっと並んでいました。割り当てられた建物に入ると、ちょうど夕食時でバケツに白いものが運ばれてきました。「アメリカにはご飯がある」と思ったらオートミールで、アメリカカウジン（アルミ製のくぼみのあるトレイ）に山盛りに出されました。コンセットハウスの壁には、どこそこにだれそれがあるという消息の書かれた紙がびっしり貼られていて、一緒に帰ってきた生徒たちが家族や親戚に引き取られるまで二週間くらい滞在しました。二人は最後まで引き取り手がみつからなくて、山田先生が預かって出ました。あとで、二人のうち一人は母親の消息がわかったそうです。

子どもたちが引き取られていったので、私も父のいる首里にトラックで向かいました。米軍の激しい攻撃を受けた首里で残っているのは教会の残骸だけで、かろうじてそこが当惑だということがわかりました。伯母が迎えに来てくれていて、うれしくて抱きついて泣いたら、「アイ、ヌーガクヌワラベー（あら、この子はどうしたんだろう）、みんな元気なのにヌーンチ泣チュガ（どうして泣くの）」と言われました。肝っ玉の据わった伯母でした。その足で父が勤務していた城西小学校に行きました。教室代わりのコンセットハウスの前に立って出迎えてくれた父は、別人のようにスマートになっていてびっくりしました。

首里に帰ってきてから三日目に、那覇国民学校の渡嘉敷真睦校長が沖縄民政府の文教局長をしているというので、民政府のある玉城村親慶原まで父とヒッチハイクで訪ねていきました。若い女性が手

を挙げるとどんな車でも止まってくれました。親慶原では、コンセットハウスから出てきた渡嘉敷先生に「ああ、ご苦労様でした」と声を掛けられ、涙があふれました。私は「生徒を十一名連れて帰ってきました。亡くなった生徒は……」と続けようとすると、「いや、その話はもう後でいいです」と遮られ、コンセットに招き入れられました。「今の沖縄にはこんなものしかない」と勧められたのは、黒砂糖かと思ったらチョコレートでした。例のアメリカカウジンに盛られていました。

渡嘉敷先生の配慮で十一月には復職がかない、首里の赤田町にできたばかりの城南小学校に配属されました。

■戦後を生きる

疎開中に書きためたものや、疎開先で撮った写真もあったのですが、城南小学校時代に台風で家が浸水して、ぜんぶ駄目にしてしまいました。規格住宅の粗末な家は屋根もテント張りで、当時は瓦葺きなど夢のまた夢で、茅葺きが一番の立身出世でした。わが家も茅葺きにするつもりで外に積んであったところ、茅が暴風で飛ばされ、下水口に溜まって水が上がってしまったのです。台風の後、濡れた蒲団や着物を乾かすのが先で、日記や写真に気づくのが遅れ、紙質もインクもよくなかったのもう後の祭りでした。

疎開中の記録をすべてなくしてしまい、もう忘れてしまおう、と思っていたところ、浦崎康華さんという人が私に会いたい、と勤め先の学校に電話がありました。遭難した生徒の父兄には会いたくな

い、と思っていたのでもしやと警戒し、結局会いませんでした。浦崎さんは新聞記者で、ちょうどそのとき、戦後初の対馬丸遭難者の遺骨収集の話が持ち上がったいて、浦崎さんは私のクラスの子どもたちの消息について心当たりはないか、聞きたかったようです。当時の私は、思い出したくないし、触れてほしくありませんでした。後で、遺骨収集の話聞いて申し訳なく、自己嫌悪に陥りました。

那覇の市場で声をかけられたことがあります。市場で靴を売っていた人が飛び出してきて、「私を覚えていますか」と聞かれました。だれだか思い出せずにいると、「嘉数文子の叔母です。文子はとっても先生を慕っていました」と話していました。その子は級長をしていて、ミウラエーグワの可愛い子でした。その後しばらくは市場の前を通るのが怖くて、できるだけ通らないようにしていました。外に出るとだれかに会うような気がして、なるべく学校と家とを往復して、と思うたものです。

昭和五十年に出版された『悪石島―学童疎開船対馬丸の悲劇』（大城立裕・嘉陽安男・船越義彰著）を読んだときに、「なるほど（歴史は）こんな風にして残すのか」と思いました。忘れていたつもりでしたが、それからは思い出そうと心がけました。同じころ、真和志中にいたときでしたが、沈没した地点へ船が出るので行きませんか、とNHKから連絡がありました。そのときは決心がつかず、断わったのですが、その後、小禄中にいた昭和五十二年に、NHKから再び誘いがありました。三十三年忌が終わった年だったので、「子どもたちも三十三年忌が過ぎて神様になったから許してくれるので

はないかと思うので、行きます」と答え、小禄中の生徒二人を連れて参加しました。献花をして部屋に戻って休んでいると、対馬丸で家族を亡くされた翁長ブギ先生が遺族を代表して来られ、「船の中での様子を聞きたい、あなたを恨むことはないです。その時の状況だけ聞きたい」と頼まれました。そこで、「子どもたちは夕食のライスカレーをととても喜んでいました。船が出るときは涙も流したけれど、不安な気持ちにはなかつたと思います」という話をしました。

毎年八月二十二日を忘れたことはありません。母が元気なころは、必ず電話がありました。そして、「ターンソーラングトウクワ、ルーチュイクワ（だれも連れてこないで、一人でおいで）」と言って、二人で食事をしました。私と母にとつて八月二十二日は誕生日と同じくらい大切な日で、でもそのことをおおっぴらに祝うことはできない悲しい日でもありました。

■亡くした子どもたちのこと

対馬丸に乗船した私のクラスの子どもたちは一人も助かりませんでした。あれから六十五年が経って、みんなの顔が思い出せないのが残念でなりません。せめて記憶の断片を拾い集めて、とどめておくことにします。

級長をしていた嘉数文子さんの家は牧志で漆喰を作っていて、お金持ちのようでした。ある日、文子さんのお母さんがタバコを一カトン持って家へやって来ました。タバコなど巷で全然見かけなくなっていたころです。「うちは父もタバコを吸いませぬので」とお

返ししようとする、「どなたかにどうぞ」というので頂戴しました。疎開の勧誘に行くと、文子さんのお母さんは「先生が行くなら行かせます」と言っていました。四、五年前に文子さんの写真が対馬丸記念館に飾られたときは、写真の前で涙が止まりませんでした。

対馬丸が沈んだことが父兄の耳に入ると、久米のわが家の前には私のクラスの子どもたちの父兄がだれかしらいつも立っていたそうです。父は先祖代々の品や家財道具を赴任先の具志頭に避難させるつもりで那覇に出てくるのですが、そういう訳でなかなか家に入らなかったとのこと。どうにか家に入り、閉め切った部屋の中でどうにもやりきれずにいると、仏壇の棚の上の、文子さんのお母さんから頂いたタバコに目が止まり、試しに吸ってみると非常に心が安まったそうです。以来、戦後もずっとタバコを吸っていました。十・十空襲で家は焼けてしまいましたが、後年、父は「こんなことをいうと子どもを亡くした父兄に申し訳ないが、十・十空襲は僕にとって福音だった。焼けた後は誰も来なくなったから」と述懐していました。

仲宗根ヨシ子さんの両親は、父の赴任先の具志頭まで尋ねてきていたそうです。仲宗根さんのお父さんは大工さんで、西新町（今のロワジュールホテル那覇近辺）に建てたばかりの家がありました。

玉城和枝さんはサイパンからの引揚者でした。高等科では昼の食事が済むと、三十分くらいクラス単位でリクレーショントイムがあり、それぞれの特技を披露してもらっていました。和枝さんはポナペの歌をあちら風の振りも入れて上手に歌い、それが可愛くて、ク

ラス全員で拍手喝采したものです。和枝さんにはカツオ船を持っているお兄さんがいました。家庭訪問に行くと、当時の沖繩の男性にはめずらしく、外国で暮らしていたせいかどこかあか抜けていて、あいさつもそつのないものでした。

和枝さんの家族は、戦前かあるいは戦後の早い時期にヤマトへ引越してしまっていたため、対馬丸遺族の名簿に当初載っていませんでした。復帰後、鹿児島在住の妹さんが対馬丸の遺族には年金があることを知り、その手続きのため来沖していました。県の担当課から和枝さんについて問い合わせがあり、私は迷わず「いました。よく覚えています。サイパンからの引揚者でした」と返事をしました。妹さんとは一度お会いしましたが、和枝さんが遭難してあと、お母さんは神社にお願いに行ったら消息が知れるかもしれない、と三重県に一時住んでいた、と話していました。その時は気が付かなかったのですが、きつと伊勢神宮にお願いにいったのでしょうか。妹さんが手続きを済ませ、和枝さんの、当時七十代のお母さんに遺族年金が下りることになりました。お母さんが九十代で亡くなったときには、妹さんから逝去を知らせるはきが届いていました

安座間敏子さんの家は山下町にありました。家庭訪問へ行ったら、あのころ珍しいンムクジアンダーギー（那覇ではティーパンパンと言います）が、まるで仏様の供え物のように大皿に山盛り出されています。イモもイモの澱粉（ンムクジ）も貴重品の時代です。面談をしながらもンムクジアンダーギーが気になってしょうがないのですが、「どうぞ」と勧めてくれません。とうとうお茶だけ飲んで

失礼しました。家の角まで送ってくれた安座間さんが「先生、何で食べなかったの？ 嫌いなのか？」と聞いたので、正直に「あんたが『どうぞ食べて』と言わないから手を付けなかった」と言うと、「では先生、持っていて」と急いで引き返し、サンニガーサ（月桃の葉）に包んだナムクジアンダーギーを持ってきてくれました。それを手持ちの風呂敷に包んで家に帰りました。小学校一年の末の弟は「こんな美味しい天ぷらがあるの」と大喜びでした。

高良澄子さんは嘉数文字さんと仲がよかったことを覚えていません。

残りの子どもたちもせめて写真なりとあれば思い出せるかもしれませんが……でも、みんなのことはいつまでも忘れません。（了）

あの無心な子どもたちの

死を無駄にしたくない。

誰にも知られず、

あの地平線の下で生きていきたい。

新崎美津子さん（旧姓宮城） 大正九年生まれ

大正九年（一九二〇）五月十七日、伊江島で生まれました。両親ともに教員で、伊江島は赴任先でした。三歳年上の兄も伊江島で生まれました。私自身あまり記憶はないのですが、小さいころは両親の転勤のたびにあちこち移り住んだようです。夏休みには、母の実家がある羽地（現名護市）に預けられましたので、今ではそこが自分の故郷のような気がいたします。とても景色のいいところでした。

母の先祖は明治の廃藩置県まで首里城で教育係をしていて、明治になってから羽地に土地をもらい、そこで塾を開いたそうです。ですから、羽地では近所の子どもたちから「学校寺の美津ちゃん」と呼ばれていました。そういうこともあって、私も学校の先生になるのが当たり前のように、県立一高女から師範の二部へ進みました。教員の子は教員、という時代でした。兄は、戦時下のことですので教員にならずに陸軍士官学校へ進みました。

私が女学生のころには母は教員を辞めており、那覇市泊に家を建てて、住んでいました。女学校は自宅から通い、師範の二部では最初の一年間は寄宿舎にいて、残りの一年は家から通ったと思います。師範を出て、最初の赴任地は伯父が校長をしていた国頭の久志尋常高等小学校でした。久志にいたころ兄の戦死の報が入りました。戦地で亡くなったのではなく、習志野で軍の飛行機に搭乗中の事故とのことでした。当時、出征兵のいる家や戦死者の出た家はなにと優遇措置があり、それもあつてか、まもなく那覇の垣花尋常高等小学校に異動になり、それから昭和十八年（一九四三）に天妃国民学校に来ました。

昭和十九年に入ると、市内の各学校には兵隊さんが駐屯するようになり、授業中も校庭に軍靴の音が響き、勉強どころではなくなりました。七月七日にサイパンが陥落すると、「次は沖縄があぶない」とあわただしくなり、疎開の動きが加速されました。子どもたちに疎開を勧めるように、という指示がありました。非常時に親と子が離ればなれになるわけですから、親御さんも決心がつかかねていました。県の学務課からは「急げ、急げ」と言ってくるので、私たちも家庭訪問をして、「従兄弟の〇〇さんが行くから、いいでしょう」というような調子で疎開を奨励しました。本来、疎開は三年生以上、と言われていましたが、なかなか人数が集まらないので低学年の生徒も希望すれば行きました。

当初、校長先生から低学年の子どもたちの引率指導として行くよ

うに、と言われたときには、音楽の先生である外間先生と二人、と聞いていましたが、どういう事情があったのか、出発のときには田名宗徳先生と一緒にした。

疎開には家族を連れて行ってよい、ということでしたので、一高女の四年生だった妹の祥(よし)子を連れて行くことにしました。「平和の礎」には違う字で名前が刻まれています。妹とは九歳も歳が違うので、幼稚園でお遊戯をしているのが可愛かったという思い出はありますが、妹が物心つくころには私は師範学校の寄宿舎へ入ったり、また、卒業すると久志の小学校に赴任しましたから、それまであまり一緒に暮らしていませんでした。船が沈むときに離ればなれになってしまいましたが、漂流中、妹はどこかで助かっているだろう、と思っていました。疎開の話が出たとき、当時は軍国教育を受けていますから女子も意気盛んで、妹は当初「行かない」と言っていたんです。「沖繩に残って、沖繩を守る」と言うのを家族で説得して、連れて行きました。私も軍国教育に何の疑問も持たず、ずっと戦争には勝つと思っていました。

出港当日の港では親御さんが代わる代わるやってきて「先生、うちの子をお願いします」と頼まれました。まさか、こんなことになるとは思いませんから、「わかりました」とお預かりしました。その約束を果たせなかつたわけですから、親御さんに会わせる顔がありません。親御さんにすまない、という気持ちはいつまでもなくなりません。

船が出たのは午後六時三十五分でしたが、出港の時間は知らされていませんでした。船の中の子どもたちは友だちといっしょですし、枕を投げたりしてはしゃぎ、修学旅行気分でした。やがて子どもたちも寝付き、静かになりましたが、私はどうしても眠れなくて妹と二人甲板に出ました。船倉にいと様子がわからないので不安ということもありました。

甲板で海を見ていると、魚雷が近づいてくるのが見えました。菱形の蠟燭のような形をしていました。攻撃されて、船は真っ二つになったと思います。私は舳先に向かって、妹の手を引いて甲板を走りました。甲板には大勢人が倒れていて、すでに事切れているようでした。その倒れている人たちの身体を除けながら、走りまわりました。そのまにどこで怪我をしたのか、妹が「足を怪我した」と言うのですが、振り向く余裕がありません。「今、ちょっと黙って」と言い終わるか終わらないうちに横波が来て、甲板から払い落とされました。あの時、怪我をした妹にもう少し優しい言葉をかけてあげればよかつた、と悔やまれてなりません。それが妹との最後になってしまいました。

海に投げ出される直前、私は無意識のうちに深呼吸をして顔に手をあてていました。「これで私はおしまいだ」と思ったのですが、一度海に沈んで、それからびよんと浮かび上がりました。たまたま浮き袋のようなものが目の前にあったのでそれにつかまり、しばらく波間に浮かんでいると、板を四、五枚荒縄で綴じたものにつかまり、それにつながりました。辺りを見回すと、そこら中に子どもたち

がたくさん浮いていて、「先生」「お父さん」「お母さん」と呼んでいました。もう阿鼻叫喚です。私は自分がつかまっているのがやつとで、「みんな、よくつかまって、つかまって」と声をかけるのが精一杯で、何もしてあげられませんでした。女の子の「宮城先生、宮城先生」という声がだんだん遠くなっていき、夜が明けてみると子どもたちの姿はどこにも見えませんでした。

明るくなってから戸板を少し大きくしたくらいの筏が流れてきて、それに乗り移りました。その筏には端に縄が付いていて、それを握って身体を支えられるようになっていました。私を含めて六人が乗っていて、六人の重さで筏が沈み、座っている腰の辺りまで海に浸かっている状態でした。後は眠気との戦いでした。眠ると海に落ちてしまいますから、眠るということは死ぬことと同じでした。顔や身体をはたいて眠らないようにしましたが、六人のうちの一人はおばあさんで、うとうとしては筏から落ちていました、いっしょに乗っている人が二度ほど拾い上げていましたが、そのうち姿が見えなくなっていました。

漂流中に、魚の群れが筏の下を通っていきました。誰かがフカだというので、あわててみんな足を上げました。果たしてフカだったのか、単なる魚群だったのかわかりませんが、何事もなく通り過ぎていきました。筏に高等科の男の子が二人乗っていました。二人とも泳ぎに自信があったのでしよう、悪石島の島影が見えるので、そこまで泳いでいく、と言うのです。「だめよ、だめよ」と止めたのですが、島を目指して、飛び込んでいきました。

筏の上でどれくらいの時間、漂流していたのかわかりません。四日間漂流して、二十六日の朝に救助されたような気がするのですが、確信はありません。その間、空腹より喉の渇きに苦しめられました。水が欲しい、欲しい、と思っていると、沖の方に煌々と灯りのついた大きな船が、飲み水の入ったビンをいっぱい積んでいるのが見えました。幻覚です。また、別の幻覚では筏の周りの波が人の頭に見えてきて、いつのまにか筏が御神輿になっています。みんなで筏を「わっしょい、わっしょい」と担いでいて、しばらくすると私の家の近くの白山病院が見えてきました。病院の坂道を下ったところが家があり、御神輿はわが家の前で止まりました。「家まで送ってくれたんだ」と思って筏から下りようとして、はっと我に返る、ということがあります。

筏の上の六人は、一人減り二人減りして、とうとう最後は甲辰国民学校の先生と私の二人だけになってしまいました。その方は私よりいくつか年下でした。お互いに今日が最後かもしれない、と思うので、まるで昔からの知り合いのように、いろいろな話をしました。いっしょに助かりましたが、鹿児島では別々に収容され、以後一度もお会いしていません。その方も戦後、本土で結婚して、沖繩には帰らなかったそうです。

私は、救助される際に漁船のスクリーンに巻き込まれそうになって、「今度こそ駄目だ」と思ったのですが、気が付いたら船の甲板に寝かされ、浴衣を掛けられていました。

そのまま鹿児島山の山川港に上陸して、近くの旅館に一月くらい滞

在しました。救助されてから旅館に着くまでの記憶はほとんどありません。旅館では、おそらく筏から漁船に移ったときの傷だと思うのですが、腰のところが化膿して痛くて痛くてたまりませんでした。治療といっても薬もろくに手に入らない時代ですから、ガーゼにヨードチンキを塗って貼るだけです。ガーゼを取り替えるときの痛さは忘れられません。その後、天妃小学校の三人の子どもたちを連れて、疎開先である宮崎の高原町へ行きました。対馬丸について箝口令が布かれていることは知りませんでした。あまり口に出してはいけない、という雰囲気でした。

鹿児島に着いてからは、対馬丸の関係者に会うと妹の消息をたずねましたが、みな首を横に振るばかりでした。あのとき、港の周辺まで行けば妹についてなんらかの情報が得られたかもしれないと思いますが、身体が思うようになりませんでした。あのとき、痛さをこらえて出かけていたら何かわかったかもしれません。

現在、焼けずに残っていた妹のノートなどは遺品として対馬丸記念館に展示してもらっています。私より妹の方が勉強もよくできましたし、漂流中も私は死んでもいい、妹が生き残ってくれば、と思っていました。

戦後、私は沖繩の地を踏む気になれず、ひっそりと生きてきました。そのせいでしょいか、船が撃沈してから六十年以上が経ち、これまで対馬丸に関するさまざまな出版物が世に出ましたが、私の名前が見当たりません。ある書物では天妃国民学校の引率訓導は田名

先生ともう一人、男の先生の名前になっていました。まるで私が対馬丸に乗っていなかったようです。けれども校長先生から引率訓導を命じられて、対馬丸に乗り込んだことは間違いないことです。

折に触れ、対馬丸関連の資料に私の名前が乗っていないことは、沖繩にいる親戚や知人から聞かされていきました。「美津ちゃんの名前、ないよ」と言われても、どうしていいのかわからずそのままになっていました。

宮崎の高原町では、対馬丸より先に疎開していた天妃国民学校の子どもたちと合流しました。具志清繁先生が引率訓導でした。高原町の学校では産休の先生の代わりに教鞭を執ったものの腰痛に悩まされ、結局、引率訓導として子どもたちの面倒をきちんと見ることができませんでした。腰の打撲が快方に向かい、ほっとしたのもつかの間、今度は強烈な腰痛に襲われたのです。子どもたちが寝起きする大部屋に隣接した小部屋が私の部屋で、元気な子どもたちの集団生活ですからずいぶんうるさかったのですがそれぞれころではなく、本当に身体が切れるような痛みでした。

医者にも診てもらいましたが、たまにずいぶん遠いところから往診に来るだけなので、なかなかよくなりません。ちょうどその頃、実家の両親が疎開してきたので母といっしょに温泉を転々として治療しました。父は高原の青年学校に勤務していました。戦争で長男と次女を亡くし、子どもは私一人だけになってしまったのに、私の具合が悪いのですから両親にもずいぶん心配をかけました。温

泉治療のお陰で腰はだいぶよくなりましたが、昭和二十一年の夏から秋にかけて、気がついたときには天妃国民学校の子どもたちは沖繩に帰っていました。

実は私は、疎開に行く前に家が隣近所で顔なじみの男性と写真結婚をしていました。戦地にいる主人から写真を送ってもらい、その写真と並んで式を挙げたのです。当時はそういうことも珍しくありませんでした。

軍医として出征していた主人とは、戦後、宮崎で再会しました。熊本で開業していましたが、沖繩に帰りたくない私は、どこか落ち着いて開業できる場所はないか、とまだ赤ちゃんだった次男を背中に負ぶって上京し、日本医師会を訪ねました。「子どもを負ぶってよく来ましたね」と言われました。医師会で教えてもらったのが、栃木県藤岡町の部屋というところでした。たまたま主人の恩師が栃木で開業していたこともあって、主人もその気になったのだと思います。医者のないところでしたから、ずいぶん忙しくしています。その後大平町の横堀に移りました。主人も亡くなり、今は息子が跡を継いでいます。

ここ（栃木県）に来てからは、朝夕地平線を見ては、「あの地平線の下で生きることはいかな」と思っていました。「誰にも見られたくない、自分を隠しておきたい。何かに隠れていたい」という気持ちは今でもあります。親御さんたちとの約束を果たせず、子どもたちを守れなかったことで私が自分を責めているのを知っ

て、「あなたに責任はない。助けようとしたって助けられるものではない」と言ってくれる人もいましたが、そう言われても私の気は晴れません。死ぬわけにはいかず、生きていかなければいけないけれど、せめてだれにも知られずにひっそりと、あの地平線の下で生きていきたい、という気持ちでした。

沖繩にはB円の時代（一九五八年以前）に帰郷して、それから何度か帰っています。滞在中は親戚に会う程度で、だれにも声をかけませんし、出歩くこともしません。姑にしてみれば、息子は無事に復員してきたのに沖繩に帰らず、栃木の田舎で開業することになったのは嫁のせいだという思いがあつたと思います。無理もありません。私がなぜ沖繩に帰らなかったか、ということを知りつつも、「いつ（沖繩へ）帰るのか」と聞かずにはおれないのです。その母が亡くなる前に沖繩へ見舞いに行きましたら、私のことを「許す」と言ってくれました。私は主人の両親、実家の両親の四人に親不孝をしました。

昭和四十五年（一九七〇）ごろから短歌を始めました。対馬丸の歌も何首か作りましたが、その度に涙が出て、子どもたちの顔が浮かんできます。対馬丸が沈んだときのことを思うと、すぐ浮かんでくるのが子どもたちの顔です。

さんざめく子等を乗せたる対馬丸 我が目の前で魚雷命中す
風化させし若き命の尊さを かたりべとなりて世にし伝えむ

あの日、子どもたちは船が沈むなんて夢にも思わず、本土に行きたい、という純粹な気持ちで船に乗りました。私は、学校の方針に従い、疎開に行きそうな子どもの家を家庭訪問しました。あの時、私が説得しなければ……と、無心な子どもたちを疎開船に乗せたことを悔いる気持ちが今でも消えません。

沖繩戦終結五十年を迎えた平成七年（一九九五）年六月二十三日の「慰霊の日」に、糸満市摩文仁の平和祈念公園内で「平和の礎」の除幕式典が開催されることになりました。除幕式典に村山富市首相が来賓として出席するということを前日の新聞で知った私は、すぐに日ごろ親しくしていたらいたる栃木県選出の参議院議員、森山眞弓さんの事務所を訪ね、「ぜひ村山首相の挨拶文の中で対馬丸のことも触れてほしい」とお願いしました。森山さんはさっそく首相官邸に問い合わせさせて下さり、その時点で当日の来賓式辞はできあがっていて、複数の係官の判が押されていたそうです。わざわざその式辞に対馬丸のことを書き加えてもらいました。そして、私はその式辞を聞くために沖繩へ行き、礎の除幕式に出席して、大きな荷物を下ろしたような気持ちがしました。

平成十八年（二〇〇六）十一月、大平町の中央公民館で開催された「戦争体験を聞く会」で、対馬丸の体験を初めて人前で話しました。それまで対馬丸のことを語るのが怖くて、固く口をつぐんできました。でも、私が対馬丸のことを話さなければ、死んでいった子

どもたちがかわいそうだと思うようになりました。子どもたちのことを忘れさせたくない、世の中のだれも対馬丸が沈んだことを知らず、対馬丸に乗っていた子どもたちのことを知らない、と思うと辛いのです。以来、あちこちから講演依頼が来るようになって、私は「これも供養」と出かけていくようにしています。

人前で話すようになって、それまでは話すとき余計辛くなると思っていましたが、逆に人に話すことで気持ちが軽くなる、ということがわかりました。話すことで固く閉じていた心がオープンになって、呼吸が楽になる、という感じです。対馬丸で亡くなった、神様のようない無心な子どもたちの死を無駄にしないためにも、対馬丸のことをいつまでも語り継いで欲しいと思います。

このごろ一人ではぼーっとしていると、昔懐かしい歌が聞こえてきます。周りにいる人に聞くと、「なにも聞こえない」というんですね。テレビを見たり、何かに集中しているときは聞こえません。また、ときどき赤紫のもんぺを着た女の子が私の側に座っています。目で見えるわけではなくて、ちょうど耳元で音楽が聞こえてくるように、そこに居る気配がするんです。そしてその女の子が私に「先生、あまり悲しい顔しないで」と言ってくれます。そうすると「ああ、子どもたちも私のことをいつまでも悲しませたくないのだ」と思うのです。

これからも、人間は悪いところに転んでしまうかもしれない。でも戦争は絶対のため、という時代になってほしい。対馬丸で子どもたちを失った、私の気持です。

あれから六十五年も経ったんですね。

責められても仕方ないと思いつつも、

そう思ったびに胸に突き刺さるものがあり、

六十五年経った今も辛いのです。

Y・Mさん 大正十二年生まれ

出身は那覇の久茂地です。当時の久茂地はというと表通りは商店が軒を並べ、久茂地川沿いには電気会社もありましたが、通りを一つ入ると閑静な住宅街でした。わが家は商売をしていて、九人兄弟の大家族でした。私はその真ん中です。

本来、久茂地尋常小学校の学区でしたが、父が松山尋常小学校の方が土地柄がよい、とわざわざめんどうな手続きを踏んで、子どもたちを松山尋常小学校へ通わせました。小学校の近くには二高女(県立第二高等女学校)や県病院がありました。

松山尋常小学校から一高女(県立第一高等女学校)に進学し、さらに師範学校の二部に進みました。教員になりたかったという訳ではなく、当時は女学校を出ても女性の就職先が限られていましたから、先生になれば勤め口の心配をしなくていい、という程度の軽い気持ちでした。師範学校への進学には、近所に住んでいて父と親しくしていた一高女の音楽の先生、羽田先生の強い勧めもあり、羽田

先生にはその後も何かとよくしていただきました。

師範学校を卒業するとたいいてい田舎の小学校にまず遣らされるのですが、私はどういうわけか、最初の赴任先が泉崎の甲辰国民学校でした。昭和十八年のことです。甲辰国民学校は県内でも名のある学校で、「新卒の先生は何年ぶりかなあ」と教務科の職員が話していました。で、もらったあだ名が「姉ちゃん先生」でした。

最初の年は五年生を受け持ち、昭和十九年にはそのまま持ち上がりで六年生の担任になりました。六年生は三クラスあり、一組は男子だけ、二組は男女混合、三組は女子だけで、私は三組の担任でした。学童疎開が決まったとき、校長先生から引率指導の話がありました。学校中で一番若くて、元気で、身軽でしたので校長先生もお願いしやすかったのだと思います。両親も特に反対はしませんでした。大あわてで疎開の準備をしましたが、準備といっても貴重品を入れる袋を縫ったり、帽子やもんぺを用意する程度のことでした。

疎開の日時については、「いついつどこそこに集合」という指示が急に出て、あわただしい出立でした。別れを惜しむ暇もないというのでしょうか。見送りに来た親御さんたちは泣きの涙でした。甲辰国民学校の引率指導は奥間先生、嘉数宏先生、上原初子先生、私の四人でした。生徒の数は覚えていません。私のクラスからは十人前後でした。

乗船当日はまだ夜が明けないうちに港に集合しました。真つ暗な

空に飛行機が飛び交っていたことを覚えています。対馬丸は沖に停泊していて、夜明け前の闇の中、艇に乗って船まで行き、甲板から下ろされたはしごを上って乗船しました。前に行く生徒を押し上げながら上った記憶があります。船底は二重構造になっていて、一番下の床まで下りずに、中段の板の間に学校単位でスペースが与えられました。船内ではすることもないので、みなそれぞれ寝転がっていました。

私の記憶では出航は（八月）十七日で、沖に停泊していた三隻の船がそれぞれ日にちをずらして出かけたような気がするのですが、定かではありません。出航後、真つ暗な船内でなかなか寝付かれずにいたら、家族疎開のグループの方だと思うのですが、近くにいた軍属らしい人が「今日はちよつとあぶないな。できたら、甲板に上がつといで」と周りにそれとなく呼びかけていました。甲板に上がるといっても、縄ばしごを上らなければならぬので容易なことではありません。生徒たちに声をかけると、上級生は起き出して上がってきました。甲板の上は海風が涼しくて、うとうとしていると一発目が来ました。とたんに船が止まり、と同時に船底から人がどんどん上がってきました。みるみるうちに甲板は人でひしめきあい、すごい混雑です。近くで船員さんがボートを下ろす準備をしたり、暗い海上に向かって次から次へと筏を投げていました。私はそのボートの一つに乗せてもらい、海上に降りていきました。

あとちよつとで着水するというところで、二発目の魚雷が船に命

中し、そのショックでボートから海に投げ出されました。なにがなにやらわからず、気が付いたら辺りは真つ暗です。あちらこちらで「助けて、助けて」と泣き叫ぶ子どもたちの声が聞こえました。投げ出されたものの浮き輪をしていたので沈むことはなく、しばらくすると様子がわかってきました。衝突のショックでボートがひっくり返り、私はそのままひっくり返ったボートの中に閉じこめられていたのです。どうにかこうにか外に出て、流れてきた筏に乗り移ることができました。

それから救助されるまで長い長い時間でした。朝が来て、夜が来て、また、朝が来て、その間、ずっと眠気との戦いで、お互いに隣り合っているものどうしで、ほつぺたを叩いたりして眠らないようにしました。寝入ってしまうと、筏から落ちてしまいますから、寝ることは死を意味しました。筏には子どもたちもいましたが、寝ないでいると幻覚を見るようで、「あそこに」お母さんがいる」と言っていると飛び込もうとします。何度も止めましたが、一人またひとりと海に飛び込んでいきました。

私の記憶では三日三晩漂流し、ようよう見つかって駆逐艦に救助されました。鹿児島で休養した、という記憶はなく、先に甲辰小学校の学童が疎開していた高岡国民学校（宮崎県東諸県郡高岡町在）へそのまま向かったような気がします。

高岡町は宮崎市に割合近く、町といってもずいぶん田舎でした。終戦までそこにいましたが、教壇に立つことはなく、疎開学童の世

話に明け暮れました。学校から少し離れた高浜というところに有名な「月知梅」という国指定天然記念物の梅林があり、その近くにある公民館が私たちにあてがわれた宿舍でした。炊事係は糸数さんという方がいましたから私の役目はもっぱら食糧調達で、兵隊さんのトラックにヒッチハイクで乗せてもらい、カボチャやサツマイモなど仕入れてきたものです。

食糧は十分でなく、子どもたちはいつもお腹を空かせていました。二年生の男の子が空腹の余り、何か悪いものを食べてしまったのでしよう、下痢が止まらなくなりました。村の人が「赤痢ではないか」「伝染病ではないか」と恐がり、小さな藁葺きの小屋を建てて、そこに寝かせ、隔離しました。私がその子を看病していましたが、お粥と梅干しの食事もなかなか口にしてくれず、赤便ばかりでした。村の医者からは「よい薬があるけれど、とても手に入らない」と言われ、なすすべもなく一日一日とやせ細り、とうとう他界してしまいました。対馬丸の子ではありませんでしたが、今でも心の痛むことです。

日本が戦争に負けるはずがない、と思っていましたから終戦を知ったときはショックでした。戦後、沖繩に引き揚げる話が出たときには、引率した生徒たちのほとんどが助からなかったのに、教師であった私が生き残ってしまったのですから、沖繩へはもう帰らない、と決めています。まもなく教員を止め、熊本に疎開していた両親の元に行きました。それから結婚し、大阪へ出てきて、京都で

暮らすようになってもう五十年以上になります。

戦後初めて沖繩に帰ったとき、ちょうど結婚したばかりのころでした。覚悟はしていましたが、引率した生徒の遺族にずいぶんいろいろ言われました。自分の子どもは帰ってこないのに、引率した教師はのうと生きていますから、親御さんからすれば当然のことです。子どもを亡くした親御さんの立場に立てば、生き延びたことを責められても仕方ありません。そうは思いつつも、そう思うたびに胸に突き刺さるものがあり、六十五年経った今も辛いのです。「小桜の塔」が出来てからは、私が帰郷するたびに今年九十歳になる姉が何も言わずにお線香やお花を用意してくれ、いっしょにお参りしてくれました。

戦後、対馬丸の話は家族にも誰にも話していません。ひたすら思い出さないようにして生きてきました。ですから、大方のことは忘れてしまっている、と思います。あんな辛い体験は忘れてしまった方がいいんです。あれから六十五年経って、こうして請われるままに話をしたものの、私の話したことが対馬丸の遺族や関係者の方の心にどう響くのか、あるいは気持ちに害するようなことがあったらと不安でなりません。自ら語ったことで私自身が心を痛めている有り様です。

(了)

附 録

対馬丸遭難者遺族会が昭和五十三年に刊行した、「記録と証言 あゝ学童疎開船対馬丸」より、すでに故人とられました、田名宗徳、当間重善、両訓導の寄稿文を転載いたしました。

渦巻く船倉に学童らの声

天妃国民学校高等科訓導 田名宗徳（故人）

■出港

昭和十九年七月、サイパン島の日本軍は全滅し、緊急閣議は南西諸島の老幼婦女子と学童の疎開を決定していました。

当時、私は天妃尋常高等小学校の五年の受け持ちでした。軍国主義教育が盛んな時で、学校では、三年生以上は男女とも団体訓練を主としてやっていました。強健な体と戦闘意欲を盛り上げるという目的で、炎天下で訓練をしましたので、はじめは倒れる子供たちも多かったのですが、訓練が重ねられると共に少なくなっていました。

当時、私は学校で戦況報道係をしていました。毎日毎日の南方戦略の状況を細かく地図に書き込んで全校生徒に知らせる係でした。当然、そういう係をしている以上、戦略については他の人よりも研究していなくてはなりません。サイパンが全滅したことを知った時、私は沖繩も大変なことになると予測していました。それは戦闘にB29が使用され、その航続力がサイパンを飛び立って、沖繩を爆撃し、さらにサイパンに帰ることができる、ということと、日本本土と南方諸島を遮断するには沖繩が重要な地点にある、そのようなことから判断してアメリカは沖繩をたたくであろうと考えたのです。

そのためにもB29が大挙飛来してくると那覇や首里の町だけでは

沖繩全体がつぶされてしまう、と私は考えていました。けれども軍国主義の社会で、そのようなことはうっかりしゃべれませんので、私は多くの人には話ませんでした。ただ、親しい友人にはもう那覇の町もないぞ、と話していました。那覇の町がなくなるということとは、教育がなくなることでだと私は結論していました。

沖繩はつぶされる、だとしたら、次代の人材を育てる意味からも子供たちを沖繩以外の安全な場所に疎開させる必要がある、これが疎開学童の引率を引き受けた私の理由でした。

八月二十一日、天妃国民学校、甲辰国民学校、泊国民学校、垣花国民学校、那覇国民学校の生徒約五百人（この人数は那覇の五つの学校のみ）と引率教員三十人が那覇港に集合しました。私はその隊長として行くことになりました。疎開に必要な荷物や学童の道具は父兄の方が各校それぞれ手分けして港に運んできました。

私たちが乗って疎開しようとする船は、当時、満州から沖繩に駐屯した歩兵部隊であります。その兵員を輸送してきた七千トン級の船三隻が入港していましたので、その空いた三隻の船を利用して学童を移動させようということでした。

私たちが乗ったのは対馬丸といって七千トンくらいの船でした。その船は船倉が前後にあつて、前の方には那覇の学童が、後の方には地方の学童と一般疎開者が乗り、日が慶良間の島陰に隠れようとする夕暮れ時に出港しました。三隻の船の外側には二隻の駆逐艦がつき、三角形の体形で五隻の船団は進みました。対馬丸は船団の左側にありました。

出港時は状況がよくありませんでした。潜水艦がよく出没する時刻は暮れ方と明け方でした。船団はそれを見こしてか、そのまま続航せずに瀬底島との間の海上に停泊し、二十二日の夜明け方、再び宮崎に向け出港しました。

船内での子供たちは、先生方が三十人もついているし、戦時中とはいえ、日本は絶対に負けない、と教えられていますから、ちょうど遠足にでも行くように、どんちゃん騒ぎをするありさまでした。

また、私たちも、この船団には駆逐艦が二隻もついているし、当時の日本海軍の駆逐艦というのは優秀だといわれていましたので、たとえ敵の潜水艦が現われても、しつぽを巻いて逃げたのではないかとしか考えていませんでした。

けれどもその時、私の船の司令官（船長の他に全体を指揮するために若い陸軍少尉が乗っていた）に呼ばれ、子供たちが騒ぐことは最も危険であるから静かにさせるように、と注意をうけました。

■緊急指令

司令官の話では、敵の潜水艦はいくらでもウロウロしているから、子供たちを甲板に出してはいけない。同時に、紙くずなども海上に投棄してはいけない。それを見つけることによって、何がしかの船が航行しているのだということを見られるから絶対にいけないということでした。

私自身、隊長である以上、そのことをみんなに伝えなくてはなりません。私は先生方を集め徹底すると共に、子供たちに注意しまし

た。船も灯火管制がされていて、人の顔も電灯の真下あたりのちょっとした所しか見えませんでした。五百人（この人数は那覇の五つの学校のみ）近い子供たちです。中は暑苦しいし、マイクはない。それだけに徹底するのはたいへんなことでした。そういう状態が二日間続き、すっかり声もかかれてしまっていました。そのような中で船団は船脚の遅い方の船に合わせて航行していました。二十二日の朝、私は再び司令官に呼ばれました。もう敵の潜水艦がこの船団を囲んでいる。だから非常に危険な状態にあるので、子供たちを本当に静かにさせなさいという注意でした。子供たちは相変わらず遠足気分でした。

その日の夕方、私はまた呼ばれました。今晚は先生方は全員寝てはいけない、ということでした。その時、船は奄美大島と鹿児島との中間ほどの地点にありました。七島灘の近くでした。島が多いし、波が荒い、そういう所が最も危険だということです。

その時、同時に、積んであるイカダを全部ほどいて甲板に並べるように、という命令も出されていました。そのイカダというのは満州から沖繩に兵隊がきた時に利用したという、太い竹を編んで作った五、六人乗りのものでした。それが幾十とありました。

この命令を聞いた時、これはただ事ではないと思いました。それまでは優秀な駆逐艦が二隻もついているのだから、と内心は安心したところもあったのですが……。

しかも、その時に、子供たちも全員甲板に上げるように、という命令なのです。それで、先生方を集め、このような命令である、今

晩さえ越せば、明日はもう鹿児島に行くのだから、今晚は一人も寝ないで、甲板で子供たちを看視して欲しいと伝えました。

疎開船には尋常三年生から高等科の二年生まで乗っていましたから、特に高等科の生徒の中には甲板にずらりと並べられたイカダを見て、いよいよ危険が迫ってきたな、と感じている生徒も多くいました。

船は大きいので、船倉の両側にアミバシゴがさがっていました。いざという時に備えるために、そのアミバシゴを昇り降りする練習もさせました。けれども、そういう練習は小学生はあまりやりませんでした。疲れているし、船酔いはするし、あまり危機感というものもなかったからでしょう。真面目にやったのは六年生や高等科の生徒でした。

子供たちを甲板上げる任務を一応終えて、甲板の方はどうなっているだろうかと思いつながら、私は上がってみました。甲板は踏み場もないほどに子供たちでいっぱいでした。寝ころんでいる子供、座っている子供、七千トンの船ももうこれ以上は上がれそうにもありませんでした。

全員上がるようにといっても、やはり上がらない者はいました。船倉に降りて、確認をすると、そこで寝ている者もいました。少なくとも五、六年以上の子供たちは上がったでしょう。暗いので顔は見えないし、体の大きさを判断する以外はなかったのですが、甲板を歩けば、足や頭を踏んでしまうほど、いっぱいでしたから、その状況から判断して、おそろく、上がっても寝られなくて、また下に

降りた子供たちもいたことでしょう。

■爆発

私はそれから自分の学校の先生方はどうなっているかと思つて探しましたが、たしかな確認はできませんでしたので、一応は甲板上がったんだらう、と思いました。

高等科の先生は家族七人が乗っていたのですが、子供の一人が急性肺炎を患つて、家族みんなで船の医室に行つていてということでしたので、これも大丈夫だろうと思ひ、次は自分の家族のことを考えました。私は母と妻と小学一年生の女の子を連れていました。

船倉にいたのを、そこではあぶないからと甲板に上げたのですが、甲板はもう座る場もないほどいっぱいでした。探しに探したところ、船のへさきのとこに半畳くらいあいてるところがありました。そこに今晚は坐つているように、といつて、母と妻と子供、それに女の先生一人を何とか座らせて、自分の座る場を探しました。私は私たちが入っていた第一船倉近くの舷側（げんそく）に、やっと坐れる場所を見つけて、舷側にもたれるようにして坐っていました。

……子供たちも上げるだけ上げた。先生方も上げるだけ上げた。まだ上がらない人もいるだろう。だが、それはやむを得ない。私は声がつぶれるまで何十回も呼びかけた。言つても聞かないのだから、もう自分にもこれ以上はできない。やるだけはやつた。

その責任は果たしたという安堵感から私は腰をおろしました。しばらくして兵隊が五、六人私のところに来てきました。その船の

へさきには大砲がありました。敵の戦艦がきたらそれで応戦するた
めにです。その係の兵隊でしたが「先生、この船は非常に運が強い
んです」というのです。話によると、満州から沖繩にくる途中、魚
雷をくらったが、幸い不発だったということでした。

そのような話を交わしているうちに時間は午後の十時近くになっ
ていました。甲板の上の子供たちはもうスヤスヤと寝ていました。
声ひとつなく、静寂そのものでした。私も坐つてじつとしていると、
いつの間にかウトウトしていました。

と、その時、ドカーンともものすごい音がしました。それは私が
坐っている真向かいの舷側からきたようでした。先ほどまで私たち
が入っていた第一船倉がまともにやられたのでした。

もう、その時は何が何やらわかりませんでした。静寂の中の爆
音はものすごいもので、急にやられたということだけは覚えてい
ますが、後は自分自身を失ってしまっていました。

しばらくすると上からいろいろなものが落ちてきました。意識は
もうろうとしているし、おまけに夜だし、何が落ちてきたのかわか
らないが、何かがどんどん落ちてくることはわかりました。

それから何分たつたでしょうか。落ちるのが静かになった時、私
は我にかえりました。

そうしたら、私の足先から五、六十センチ先が全部ふっ飛んでい
ました。

船倉の上にはフタがされ、その上にはカバーがかけられていて、
その上にも踏み場もないほどに子供たちが寝ていたのですが、その

子供たちもみんなふき飛ばされていたのです。

第一船倉の横っ腹には大きな穴があき、滝のような轟音をたてて、
海水が流れ込んでいました。私は、あまりにもとつさの出来事にな
うしていかわかりませんでした。そこに飛び出してきたのが先ほ
どの砲手の兵隊でした。「何をばやばやしているんだ、上にあがれ」
と怒鳴るので、それに促されて、私は船の一番上にあがりました。
すると、三人の子供たちがそこにうつ伏せになって倒れていまし
た。ふき飛ばされたのが、そこに落ちたのです。

私はとつさに「兵隊さんこれはいったいどうしたんだ」と叫びま
した。「もう死んでいる。助からん」という声を聞いた時、私の意
識ははつきりと回復しました。

■沈没

それまでは自分が教師であるのか、何であるのかも思考がまとま
りませんでした。ただ、この危険をいかにして逃れるかということ
しかありませんでした。

子供たちの死体を見た時にあ、自分は教師であったのだ！と気
づきました。

私はその時、自分の子供を抱き、海に飛び込むつもりでおりまし
た。爆破された船倉にはすさまじい勢いで水が流れ込んでおりまし
たが、その中から助けてくれという子供たちや教師の声が聞こえ
てきました。私は子供を妻に渡し、すぐに船倉へと降りて行きまし
た。どうしようもない、どうしようもないと知りつつも、何とかし

て助けねば、との気持ちからでした。ひん曲がった階段を、夢中でかけ降りたので、ちぎられた鉄片で、私の足はいっぱいに傷を負いました。降りてみると、入口に用意しておいた縄ばしごもどこにぶっ飛んだかわかりません。ただもう、中はゴウゴウと水が渦巻き、その渦に巻かれながら助けを求め声がかえりませんが、その水の勢いでは助けるすべもありませんでした。

と、その時、船は船尾から傾き、流れ込んだ水の力で、バリバリと恐ろしいほどの音をたてて甲板を崩しはじめました。船はだんだん傾きの度を増していきます。もうどうにもなりません、私は急いでかけ上がりました。私は妻から子供をうけとりました。へさきから砲手たちが海に飛び込んでいました。妻たちがどうするかというので、私は海に飛び込めといったのです。すると、飛び込めないという返事なので、よく見ると、船尾は沈み、船首は上がり、海までは相当な距離になっていました。これは飛び込めない、と思っ

ているうちに沈没でした。

あつという間に、渦に巻き込まれて、息のある限りはもがいて、もがいて、海の中からはい上がろうとしました。もうだめだ！まさに息が切れようとした時、私の頭は水面に上がっていました。不思議なことに、私は子供を抱いていたため一命を救われました。緊急命令が出された時、私たちは全員、救命具を着けるよういわれていました。甲板にいた子供たちは全員着けていましたが、船倉の中にいた子供たちは、暑いので、どうであったか、よくわかりませんでした。

渦に巻き込まれた時、子供はいつの間にか、私の手を離れていました。けれども、海中でもがく私の右手の小指が子供の着けている救命具のひもにひっかかっていたのでした。もちろん救命具は私も着けていましたが、私の子供も大人用の救命具を着けていましたので、浮き上がるのが私よりも早かったわけです。その小指にひもがつながっていないければ、恐らく私も今、生きていなかったでしょう。

ようやく浮き上がってみると、子供は水を飲んで生きていたようでした。船は沈没しました。それから冷静でした。これから、自分たちはどのように流されて救われるかと考えました。私は子供をおぶい、丸太につかまりながら流されていると、少し先にボートみたいなものが浮いているように見えるのです。私はそれに向かっ

て泳ぎました。泳ぎ着いてみると、それはたしかにボートではありませんでしたが、ひっくり返っていました。そのひっくり返ったボートの上にもたくさんの方がたかかっていました。泳ぎ着いた人たちがその上に乗っているのです。

後で分かったことですが、そのボートは多くの子供たちを乗せたまま転覆していたのです。恐らく五、六十人の子供たちが出られな

■死の漂流

ボートに近づいてみると、前の方に一人の人が坐れるくらい空いていました。私は、そこに何とか坐れないものかと思い、飛び乗ったのですが、斜めになっている所なので、波のたびに振り落とされる始末でした。このままでは明け方までもちそうにありませんでした。

そうしているうちに、例の竹のイカダが流れてきました。だれも乗っていません。子供をボートの青年にあずけ、私は泳いで行ってイカダを引っぱってきました。五、六人が乗れるものです。私と子供とその青年がイカダに乗りました。

流れて行くと、いろいろなものに人がすがっていました。それでは最後の勇気をふりしぼって、声の限りに叫びました。——明日になったら、必ず救いの船がくるから、今、つかまっているものを離してはいけない——と。

そうしたら、あっちこちらから田名先生と叫ぶのです。近くにいた子供たちが十人ほど泳いできて、私たちのイカダに乗りました。するとイカダは沈んでしまいました。これは大へんだということでも、みんなまた元の所に戻って行きました。

それからは漂流でした。母や妻もどこに行ったかわかりませんでした。しばらく流れていると、丸太につかまり、首だけ出して流れている人がいました。よく見ると妻でした。私は妻をイカダに引き上げました。

前方には島（薩南諸島の悪石島）が見えましたが、流れは島をは

さんで左右に分かれていました。人は右に、荷物は左側に多く流れていたように思います。

一夜が明ける（二十三日）と、あっちにもこっちにも、イカダや木に子供たちはすがって流れていました。声をかけ励まし合いながら流れていましたが、同じようには流れません。いつの間にか、全部見えなくなっていました。多くの人が右側に流れているのに、私たちは左側に流れていたのです。

朝九時ごろだったと思いますが、飛行機が上空をぐるぐる回っていました。飛行機からハンカチを振っているものだから、私たちもそれに応えてハンカチを振り、もう大丈夫だと思っていました。ところが晩になっても救いはきませんでした。

それからは七日間の漂流でした。その間、全く飲まず食わずです。私たちのイカダには私と子供、妻、青年のほかに兵隊一人と、途中で拾って乗せたおじいさんの六人が乗っていました。

そのうち、二日目の夜には、青年がサヨナラといって出て行ったというのです。後で分かりましたが、それは錯覚を起こすのです。幻影というのでしょうか。海上なのに自分の家が見えるのです。食べたくないし、寝てないので体の疲労は積もり、頭が変になるのです。私たちはイカダに乗っているとはいえ、へそまでは常に水につかっているのですから、横になるところか、振り落とされないように、絶えず、イカダにしがみついているなくてはなりません。昼間は太陽に干されて暑いし、夜になると寒くて歯と歯が合わないほど震えるのです。

三日目の夜には、私の子供が、とうちゃん久茂地の電気会社の方（本人の家があった所）に帰りたいといっていました。水が飲みたいたいのですが水があるわけではなし、どうすることもできませんでした。

夜は寒いので、子供は妻の方はずっと抱かれていましたが、夜中に妻が子供が動かなくなつたというのです。私が妻から子供を抱き取ると、私の首を強くつかまえて、それきりでした。凍死したのでした。私は、死んだ子供を海に流すのはかわいそうに思い、とにかく、死ぬのはみんな一緒だからと、イカダに子供をくくりつけました。

■幻影

四日目には、おじいさんがイカダから海に飛び込むのです。イカダにはすがつていのですが、おじいさん大変ですよ、といつて、首をつかんでイカダに引き上げるのですが、しばらくすると、また飛び込んでしまうのです。飛び込むでは引き上げることを五、六回やりましたが、こつちももう疲れ切っているし、衰弱し切っていますから、後は引き上げる力もないので、仕方なく、そのままにしてありました。おじいさんが急に「ワンナーハブニクワートーシガ」（ハブにかまれた）というので、引き上げてみると、一間半ほどの大きさのフカが、おじいさんの左側の臀部を引きちぎってありました。シュウシュウと出血はするし、手でおさえてもだめでした。十分もたたない間に出血多量でなくなりました。イカダは血だらけになりました。私たちは、おじいさんの冥福を祈り、合掌して海に流

しました。

私たちは日が暮れると、自分たちの命ももうこれまでだろう、と思い、翌日、日が昇るとああ、まだ生きている。今日一日は大丈夫だろうかと、このようなことをくり返しておりました。

波は荒く弱つた体にはこたえました。漁船が救いにこなかったのも波が荒くてどうしようもなかった、ということでした。私たちと反対に右側に流れた人たちは、二、三日で全員救助されていますが、左側に流れたのが全然救われていなかったのです。七、八メートルの波がくるのですが、イカダはその波にうまく乗っていました。

五日目の夜には私が狂ってきました。というのは、イカダに乗っていないながら、さまざまな幻影が見えるのです。昔、塩を作っている地でカタバルというところがありました。そこで、那覇尋常高等の生徒がキャンプを張って屋外訓練をしているのが見えるのです。

夢ではないかと思つたら痛いのです。頭をたたいたら同じく痛い。あ、これは夢ではないな。向こうに行けば一ぱいの水も飲ませてくださいだろう、とイカダから出ようと思いました。それを妻が、どこに行くんだ、と止めるのです。まわりは全部海だということです。でも、私にはキャンプを張っているとしか見えませんでした。

昔は公会堂というのがありました。公会堂の前にイカダが横付けにされているのです。みんなに、おい、那覇に着いたよ、公会堂のところだよ、早く家に帰ろう、というのと、どこに公会堂があるか、というものですから錯覚かな、と思つて、つねつてみたらやはり痛

い。そういう現象が出てくるのです。理性は働きます。だが、目にはそのようなものが見えるのです。

だから、青年がサヨナラといって夜いなくなつたのも自分の家が見えたのでしょう。おじいさんもそうだったに違いありません。だが、そこには家はなく海だったから、そのまま死んでいったのでしよう。

そのようなことはまだありました。半死半生の状態で助けられたおじいさんとおばあさんがいましたが、そのイカダには高等科の子供たちが十人ほど乗っていたのです。けれども、その子供たちが一人一人、イジクヒー（行ってこうね）といって去って、とうとうみんななくなつたというのです。その子供たちにもやはり幻影が見えたのでしよう。

そういう状態が過ぎて、その頃から奄美大島の海岸が見えてきました。いずれはあの島に着くんだという気持ちでした。

五日目の午前十時ごろでしたか、島の海岸に近づいていきました。ところが私たちの右も左も絶壁で後方は山という地形のところに入り込んでしまつたのでした。

■救出

岩壁に水が流れ出るところがありました。十メートルくらいこのころですから、最初は兵隊が飛び込んで行って水を飲んでいました。

海岸は切り立った岩ですから、波はどんどん打ち寄せてくるし、満潮になると、イカダがその岩にぶつつけられて壊されてしまうだ

ろうと考えて、早いうちに上陸しなくてはならないと思いました。

私は、イカダにくくつてあつた死んだ我が子はずして、くびに抱いて岩壁にはい上がろうとしましたが、気は確かだけれども、体が思うようにならない。仕方なく子供をはずして、自分の身ひとつで、やつとの思いではい上がりました。

その後、子供は波に乗り、海岸に打ち上げられたのを見ました。けれどももうその時の私には、子供を埋める元氣もありませんでした。

イカダには妻が残っていました。その間にもだんだん潮が満ち、イカダの位置も高くなってきました。自分が合図した時には岩にしがみつくと妻についてチャンスを見計らっていました。波がきたらイカダにしがみつきじつとしている。そして静かになったら、それつと合図する。それを三、四回くり返し、妻はやつとはい上がつてきました。その時にはもう正午のころですから太陽はかんかん照りつけ、石は熱く、妻はもう動かせませんでした。

私は岩から流れる水を腹いっぱい飲みました。恐らく一升以上も飲んだでしょう。

水を飲み、落ち着いたので、妻にも飲ませようと思い手に水をくんで持つて行こうとするのですが、わずか十メートルほどのところまでなのに、手が震え、足がふらつき、ダメでした。木の葉にくんでも同じくダメ。自分の口に含んで運ぼうとしても石につまずいては転んでダメでした。

兵隊を見たら千人針の腹まき（出征兵士の無事を祈るために、千

人の婦人が赤糸で一針ずつぬって、千個のぬい玉をつくった腹まきをしていました。それを借りて、水を浸し、やっと妻の口に水を注ぐことができました。

水は飲むことができましたが、右にも左にも動けない地形。私たちのいるところからさらに上に岩壁はそり立っていました。ちょうど、波の上の岩の一倍半くらいの高さで八十度くらいの傾斜になっっていました。

兵隊が、先生、もうどうにもなりません、というから、バカなことをいうな、この断崖を登ろうじゃないか、といって、それから六時間ほどかかって登りました。今考えるとよくも落ちなかったものだと思います。

断崖を登ったら日が落ちましたので、今日はその辺で寝ようじゃないかとカヤの中で寝ました。

翌朝は道を探して歩き続け、やっと田んぼを見つけました。田んぼがあるということはもう近くに部落があることだと勇気を出して歩きました。部落に着いたら青年が飛び出してきました。学校の先生でしょう、と聞くのです。消防団員が三十人くらいせいぞろいしていました。なぜかという、前々日に女の子二人に、三人の婦人が漁船に救助され、そこで休んでいたからです。

私は消防団の人に妻のことを話しました。場所はどこかと聞くのですが、私にはさっぱりわかりませんでした。だいたいの見当をつけてクリ舟を出したのですが、一時間ほどして妻は救助されてきました。

約三時間、茶、砂糖水などを飲んで休んでから、私たちは古仁屋の軍港の方に移されました。疎開船がやられたのは秘密なので、海軍の方から全員、古仁屋に集まるようにということであったようです。

そこで、しばらく静養して、私は遭難の現状を詳しく知らせなくてはならないと考え、紙と鉛筆を借りて、遭難の様子を最初から最後まで書き、校長に届けてくれるようにと潜航艇の艇長に頼みました。

実情を詳しく記し、自分も報告のためにすぐに帰りますと手紙を送りましたが、校長からは帰ってこなくてよい、二次の疎開を行なっているから宮崎に行き、子供たちの面倒をみるように、ということでした。私は宮崎に行き、それから二年後に沖繩に帰ってきました。私は教師です。けれどもたくさんの子供を死なせてしまった、自分の教育は終わった、私は海の仕事をしようと考えました。海の仕事をするにより、死んだ子供たちの供養にもなるし、母や子供の供養にもなるのだと考え、一年後、水産関係の仕事に就きました。

『打ち碎かれしうるま島』創価学会青年部反戦出版委員会・第三文明社刊)

舩先から女生徒ら押し落す

那覇国民学校訓導 当間重善（故人）

私は昭和十九年四月、戦局がいよいよよきびしくなった中で、台湾から引上げて、那覇国民学校に奉職した。その頃までは授業も一応は行われていた。しかし各教室の前後には防空壕がほってあって、時々待避訓練が行われ、校門には登校時から下校時まで、高等科二年の男生徒が木銃をもって門衛に当たっているなど、戦時色にぬりつぶされていた。

七月を迎え夏休みにはいる頃から、沖縄島守備軍が校舎を占領するようになり、飛行場や高射砲の陣地構築に全生徒が動員され、戦局の緊迫をひしひしと感じさせるようになった。そういう緊迫した状況の中で学童疎開が進められた。

学童疎開は大東亜戦争勝利のための国策に基づくものとして、学校も真剣にうけとめ、疎開の意義をじゅんじゅんと説いて勧誘に努めた。決して強制的ではなく、希望者については家庭訪問を行い、父兄とも十分に話し合って準備を進めてもらった。

重善 当間 証言 5

出発の前日八月二十日、疎開希望者を召集して渡嘉敷真睦校長から改めてこんこんと話をされ、続いて班別編成を行い、翌日の出発に備えた。

二十一日の朝、西新町的那覇港に近い、現在倉庫群のある広場に集合して結団式が行われた。いろいろの人達の話や引率団長の天妃国民学校田名宗徳訓導の諸注意などがあり、乗船時まで付近で待機を命じられた。午後二時頃、再び集合して乗船の場所へ移動した。大変な暑さの日であった。

那覇港棧橋の突端にあった水上警察署前から軍の“大発”で出発した。私たちは沖合いに碇泊している対馬丸に運ばれたが、“大発”から見上げる対馬丸の船体はものすごく高いものと思われた。

那覇校疎開団の居室は船首よりで、船艙の上部にあったが、出入口には階段が一つあるだけだった。やや中央部に船艙に荷物を入れるための天窓があいていた。天窓の四方に縄はしごをおろしてあって、万一に備えていたが、何としても真夏の船艙は薄暗く、暑苦しく、それにいきれでムンムンして、とてもたえられるものではなかった。

那覇港を出発した翌二十二日、我々引率教師はいく度か集合を命ぜられ、まだまだ若い輸送司令から「洗面に石鹼を使ってはいけない。砂糖きびなど食べ残りやごみなど海中に落すな」という注意や、「これからの海域は岩礁が多く敵潜水艦のよいかくれ場になっており、わが方の艦船が何度か襲われた所である。今夜を無事にこせばもう大丈夫だ。しかし万一の場合は予定通りの行動をとって貰いたい。児童には必ず救命具を着用させ、金銭類は身体につけて持たすよう」などということであった。

引率教師は、その指示に従って、早速それぞれの学童たちを指導して廻った。

私は妻文字と数え年三才の長女礼子を伴っていた。二十二日の夕方近くから礼子が熱を出してむづかっていたので、許可を得て、上甲板の兵隊たちの居室になっている所に入れてもらい、そこから見廻りなどをしていた。近くの部屋には船酔いの人や病人がいっぱいだった。

船室の巡視をすまして、娘たちといっしょに寝ていたが、突然妻にゆり起され、「船がやられたらしい！」といわれた。あたりは人々の右往左往する声で名状し難いさわぎに包まれていた。私は、この大海のただ中でやられてはどうしたばたしても駄目だと思ったが、妻にせかされて大急ぎで救命具をつけ、娘を背中におぶって船室をとび出した。甲板への通路はすでに海水でいっぱいになっていた。

甲板に出て見ると、ここでは生徒たちがひしめき合っていた。ふと気がつくとき妻の姿が見えない。元の所へ引返して探し廻ったがどこにも妻の姿はなかった。

中甲板へおりて行くと、五、六人の女生徒が近くに立ちすくんでいる。海面を見下すと舳先の方で投げ落すブイが、後から後から流れている。私は大きな声で「早く飛びおりて船から離れろ。いかだが流れてきたらそれにつかまるんだぞ。」と叫んだが、舷が高く、女生徒たちは中々飛びこまない。瞬時を争う時なので、私は彼女らを海中に押し落し、最後に娘をおぶったまま無我夢中でとびこんだ。

そして流れているブイにつかまって、一分も早く船から離れようと、懸命に沖の方へとブイをこいだ。

海上にただよっている人達は、口々に母や父を呼び、友たちの名を呼び、或は君が代や軍歌をうたっていて、それらの悲痛な声で騒然としていた。私も大声で妻の名を呼んだが答はなかった。

さて一夜が明けた。あれほどぶつかり合う位いた人々はもうちりぢりになっていた。昼頃、私のブイから十メートル位離れた所に子供をおぶってタライに乗っている女の人だったので、「おい元気か。子供は大丈夫か。」と聞いたら、「子供は死んでしまった。」という答えが返ってきた。気の毒に思ったが、しょうがなかった。泡瀬の人だと言っていた。やがて日が暮れ、又夜が明けた。空(から)のタライがぶかぶか浮いていた。

昼になると太陽がかんかん照りつけてとても暑いので、海水をすくって娘の頭にかけてたりした。「この小さい船はいやだ。大きな船に行つてタンタン(卵)を取つて来てよ。水が飲みたいよ」とせがまれたり、時々「お母さんは」と聞かれたりして、胸がはりさける思いであった。はたして生きて会えるだろうか……と。

日が暮れると、波のしぶきがあるものすごく強く、そして冷たく、「いつそ敵の潜水艦が浮上して一思いに殺してくればよいが。」と思うほどの苦しさだった。

三日目の昼頃、近くをジャンク船のような船が通った。遠くの方にも客船らしい大きな船が見えた。しかしそのまま過ぎてしまった。それから大分時間がたって、午後三時頃のこと、地平線の彼方に黒

い船の影が現われ、次第にこちらの方へ進んできた。

波が高いので、私達に気づかず、又行き過ぎてしまつては、と心配になり、いかだの上に立ち上つて合図を続けた。やつとこちらを発見したらしく、私達の方に近づいて救い上げてくれた。小さい哨戒艇で、救われた人々がいっぱいいて、皆、私達の無事を喜んでくれた。私達がこの艦での最後の救助者だった。

哨戒艇はやがて鹿児島港に入港し、私達は船内で配給された衣料をつけて、近くの大成旅館に収容された。その日の夕方、旅館の女中が「市役所の方が女の人をつれて、あなたに会いたいと言つて見えている。」というので、玄関におりて見ると、疲れ果てた姿の女の人がうつむいて座っている。よく見ると何と対馬丸の甲板ではなればなれになった家内ではないか。「おい、お前無事だったか。」という私の声で家内は顔を上げて、びつくりしたようであつたが、すぐ「礼子は……。」とたずねた。「二階にいるよ。」と答えると、ものもいわず二階へ上り、娘をしっかりと抱きしめ、これではじめてほつとしたようであつた。家内の話によると、ひつくり返つたボートにすがりついていたが、その翌日の夕方、漁船に救助され、山川港につれて行かれた。怪我をしていたので一日だけは旅館に泊つて翌日入院し、そこで治療を受けたが、私達の事が心配で鹿児島に出てきたのだという。市役所の職員に付き添われてあちらこちらの旅館を歩き廻つたが、どの旅館もいっばいで泊めて貰えず、この旅館まできて、疎開の係りの人がいるというので呼んでもらつたのが私

だったとのことで、本当に不思議な有難い奇遇であつた。

私は疎開団のことを学校と家に知らさなければと考え、郵便局へ行つたが、防牒上電報はうてぬ、遭難の事を書かなければ葉書は出せる、というので学校宛には「総員二十六名鹿児島に上陸した。」と書き、家宛には「親子三人無事鹿児島についた。」とのみ書いて投函した。

数日間鹿児島に滞在し、宮崎県の加久藤国民学校に疎開した。

取材を終えて

池宮 照子

二〇〇九年は対馬丸撃沈から六十五年、対馬丸記念館の開館五周年の節目にあたる年でした。同記念館では、関係者の高齢化が進む中、この機会に犠牲になった学童を引率し、生き残った訓導たちの記録を残しておきたいと聞き取り作業の依頼がありました。

最初に糸数裕子さんにお目にかかり、聞き取りを開始しました。糸数さんは八十歳をとうに超えていらっしやるにも関わらず、すばらしい記憶力で打てば響くようにお話をされました。糸数さんには二〇〇九年七月まで五度お会いし、対馬丸に関することだけでなく、疎開先でのことや帰沖後のことまでつぶさにお話をうかがいました。終始よどみなく当時の様子を語っておられましたが、「糸数さんの生徒で助かった方はいるんですか」との問いには、少しの沈黙の後に「私の生徒は一人も助からなかった」と。心の奥底から絞り出したような声でした。

二〇〇九年四月、栃木県在住の新崎美津子さんを訪ねました。東京の隅田川沿いは桜が満開でした。遠く故郷を離れて、関東平野の一隅で戦後の大半を過ごされた新崎さんは「対馬丸のことを思い出すのはつらいけれど、対馬丸でたくさんの子どもたちの命が失われたことが忘れられてしまうのはもつとつらい」と毅然とした面持ちで話されました。広大な地平線を朝な夕な眺めては故郷を思い、対馬丸

で亡くなった子どもたちへの哀惜の情をつのらせてきた新崎さんの余生が、心安らかなものでありますように、と願わずにはいられませんでした。

二〇〇九年九月、Y・Mさんにお会いしたい旨の手紙を出したところ、電話取材を希望されました。受話器を片手に必死にメモを取りました。電話の向こうでYさんが突き放すように発した言葉が耳に残り、見出しに使わせていただき、確認をお願いしたところ、ひどく動揺されていました。自ら発した言葉に自ら傷つく、というありように、「あらかた忘れてしまった」と語ってもなお忘れることのできない深い悲しみがあることを知りました。

取材を終えて、戦争で愛する者を失った多くの人々が、癒えぬ悲しみを胸に生きた戦後を思い、その悲しみは今も沖繩中を覆っているような気がしてなりません。

(了)

学童疎開船対馬丸 引率訓導たちの記録

発行日：2010年2月22日

編著・発行：対馬丸疎開学童 引率訓導証言記録プロジェクト

記録監修：財団法人 対馬丸記念会

〒900-0031 沖縄県那覇市若狭 1-25-37

電話 (098) 941-3515

URL: <http://www.tsushimamaru.or.jp>

